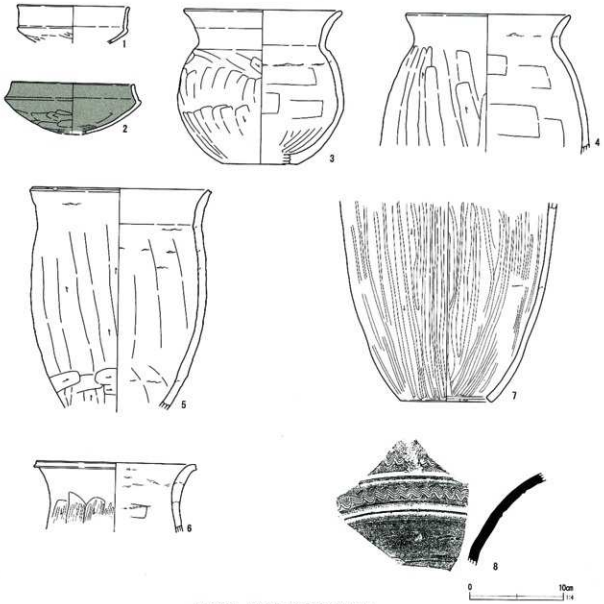
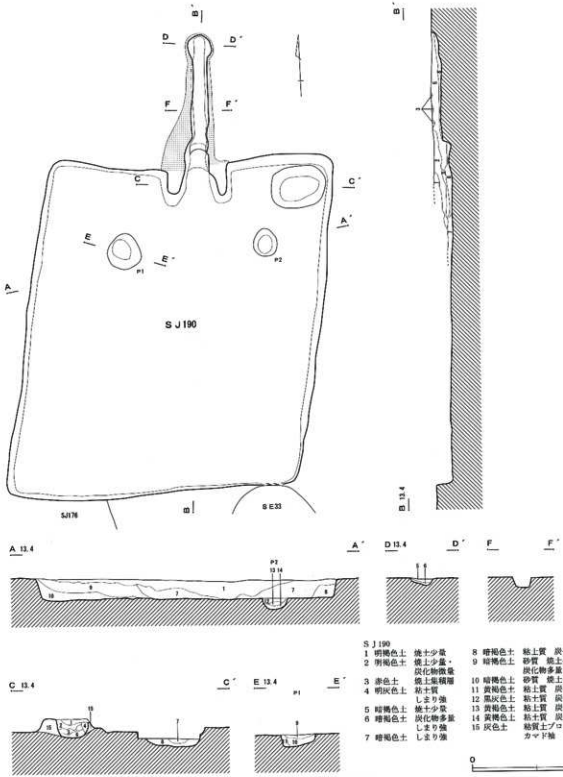


第197図　第189号住居跡出土遺物

第80表　第189号住居跡出土遺物観察表（第197図）

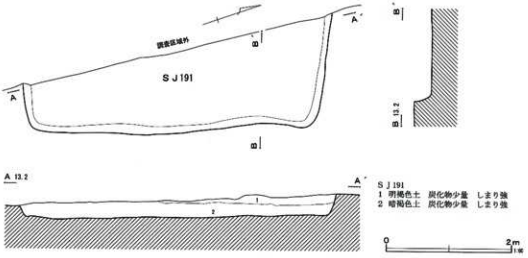
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	3.9	－	30.7	20	群東	角	普通	明黄褐		168-7
2	土師器	坏	(13.0)	4.4	－	61.3	25	群東	針	良好	黒褐		
3	土師器	壺	(16.8)	16.3	(7.9)	485.3	25	茨西		良好	橙		
4	土師器	甕	(17.7)	14.6	－	489.2	20	群東		普通	明黄褐		
5	土師器	甕	(19.3)	23.1	－	335.6	15	栃南		普通	橙		
6	土師器	甕	(17.0)	7.1	－	111.4	5	茨西	雲、針	普通	にぶい黄橙		
7	土師器	甑	－	20.9	(9.6)	795.9	25	群東	雲	普通	にぶい黄橙		
8	須恵器	甕	－	9.5	－	241.3	5			普通	灰		



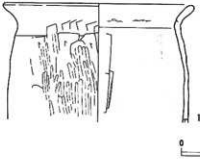
第198図　第190号住居跡

第81表　第191号住居跡出土遺物観察表（第200図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	(20.4)	12.3	－	82.5	10	栃南	角	良好	赤褐		



第199図　第191号住居跡

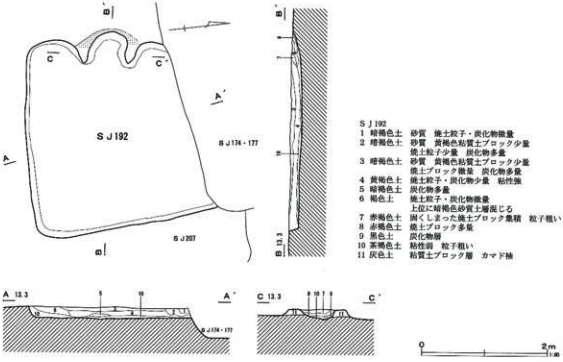


第200図　第191号住居跡出土遺物

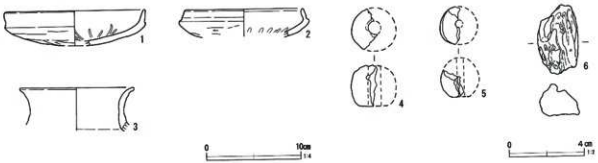
る。燃焼部・煙道部の壁面は、被熱により比較的赤色硬化している。また、焚口手前から貯蔵穴周辺に至るまで、炭や灰が分布している状況が確認された。

カマド以外の施設としては、貯蔵穴と２基のピットが検出された。貯蔵穴は北東コーナーに設けられ、平面形は楕円形で、平面規模は88×65㎝、床面からの深さ15㎝である。

Ｐ１は円形で径58×50㎝、床面からの深さ20㎝、Ｐ２は円形で径45×38㎝、床面からの深さ18㎝を測



第201図　第192号住居跡



第202図　第192号住居跡出土遺物

第82表　第192号住居跡出土遺物観察表（第202図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(14.6)	3.7	－	88.4	25	栃南	雲、針	普通	橙		
2	土師器	坏	(12.5)	3.0	－	28.3	10	佐野	雲	普通	灰黄褐	内面黒色処理か	
3	土師器	壺	12.2	4.6	－	45.3	5	群東	角	良好	橙		
4	土製品	土玉	径(2.3)孔径(0.8)厚2.2重4.8残45						雲	普通	灰		233-1
5	土製品	土玉	径(2.0)孔径(0.4)厚2.0重2.5残35							普通	にぶい黄橙		233-1
6	貝製穴飾製品		長3.5幅2.1厚1.7重6.0								赤橙	4孔、被熱強	238-2

る。

遺物は出土しなかった。

本住居跡が切っている第173・193号住居跡は、6世紀第Ⅰ四半期と第Ⅱ四半期であり、この点から本住居跡の時期は、6世紀第Ⅱ四半期以降の可能性が考えられる。

第191号住居跡（第199・200図）

調査区西側、F・G－1グリッドに位置する。第171・182・185号住居跡を切っている。

遺構の大部分は調査区外に続いているため、平面形は不明である。

平面規模は、南北4.74m、東西については1.65mまで確認できたのみである。確認面からの深さは0.33mである。遺存部分での平面形に歪みが大きいため、主軸方向は不明である。

カマドおよびその他の施設は、確認されなかった。

図化し得た遺物は、土師器甕1点のみである。

遺物の時期は、7世紀第Ⅰ四半期と考えられる。

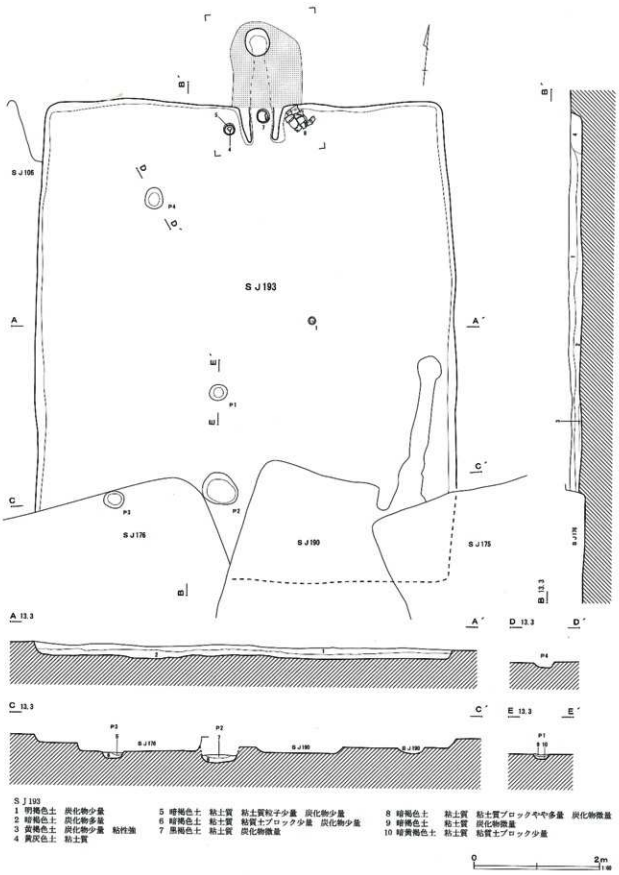
第192号住居跡（第201・202図）

調査区西側、G・H－2グリッドに位置する。第207号住居跡を切り、第174・177号住居跡に切られている。

本住居跡は、西側部分が失われているため、平面形が、隅丸方形または隅丸長方形であるのかは不明である。平面規模は東西2.78m、南北については2.95mまでの検出である。確認面からの深さ0.18mを測り、主軸方向はN－87°－Wを指す。

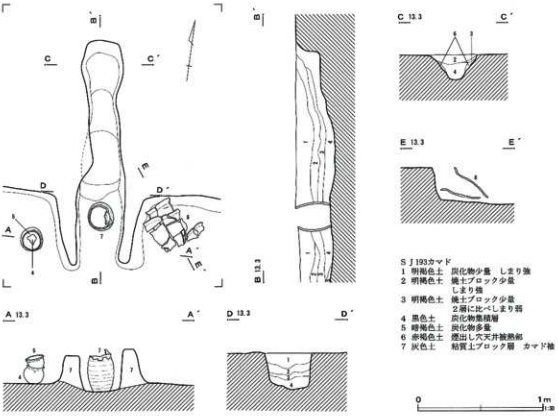
カマドは、西壁の南寄りに設けられている。カマド掘方には、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された（アミ部分）。この充填された粘質土は、煙道部の周囲を5～15cmの幅で巡らせているが、掘方底面での充填土の厚さについては不明である。方位は、N－77°－Wを指す。袖部は、遺存状況が良好ではないものの、両袖ともが確認された。壁面からの残存規模は、左袖が38cm、右袖が40cmである。燃焼部は、住居壁面の奥にまで及び、規模は40×40cm程で、床面との高低差はみられない。燃焼部から段を経て煙道部に至るタイプでないとすれば、燃焼部・煙道部合わせての法量となる。燃焼部・煙道部とも、壁面に若干の赤色硬化が認められた。

住居中央周辺には、炭や灰が散っているのが確認



S J 193
1 明褐色土　炭化物少量
2 暗褐色土　炭化物多量
3 黄褐色土　炭化物少量　粘性強
4 黄灰色土　粘土質
5 暗褐色土　粘土質　粘土質粒子少量　炭化物少量
6 暗褐色土　粘土質　粘質土ブロック少量　炭化物少量
7 黒褐色土　粘土質　炭化物微量
8 暗褐色土　粘土質　粘土質ブロックやや多量　炭化物微量
9 暗褐色土　粘土質　炭化物微量
10 暗黄褐色土　粘土質　粘質土ブロック少量

第203図　第193号住居跡



第204図　**第193号住居跡カマド**

された。カマド以外の施設は検出されなかった。

土師器坏・壺のほか、土玉・貝巣穴痕泥岩などを含め、図化し得た遺物は計6点であった。

遺物の時期は、6世紀第Ⅲ四半期と考えられる。

第193号住居跡（第203・204・205図）

調査区中央部、F－3・4、G－4グリッドに位置する。第106・175・176・190号住居跡に切られている。

平面形は長方形で、規模は南北7.24m、東西6.54m、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方向はN－7°－Wを指す。

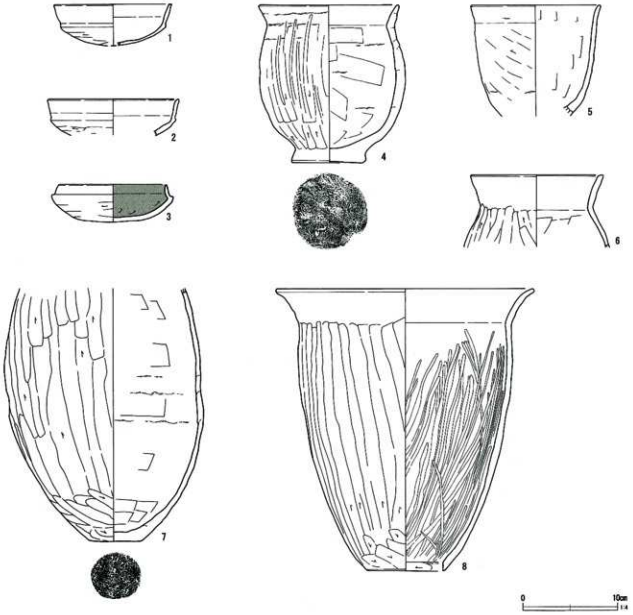
カマドは、北壁のやや東寄りに設けられている。まず煙出し部が、内側が被熱した円形のプランとして検出された。さらにカマド掘方には、地山土混じりの明褐色粘質土が充填されているのが確認された（アミ部分）。この、充填された粘質土は、煙道部の周囲を30～55cmの幅で巡らされているが、掘方底面での充填土の厚さについては不明である。

カマドの袖部は両袖ともが確認された。住居壁面からの残存規模は、左袖が58cm、右袖が56cmである。燃焼部は、床面より数cmほど窪む浅い皿状を呈し、僅かな稜線をもって煙道部へと続く。煙道部底面は、僅かな傾斜で煙出し部へと至る。燃焼部と煙道部を含めた長さは181cm程度と推測される。燃焼部～煙道部内面の、被熱による赤色硬化は比較的弱い。

カマド燃焼部内からは、土師器甕（7）が自立した状態で出土した。また、カマド右袖に寄りかかるようにして、甑（8）が土圧で潰れた状態で確認された。さらに、左袖脇からは、甕と甑（4・5）が重なった状態で出土した。

本住居跡内からは、カマド以外の施設としてピットが4基検出された。P2・P3については、床面の精査時には検出されず、床面から13～16cm掘り下げた段階で確認されたものである。

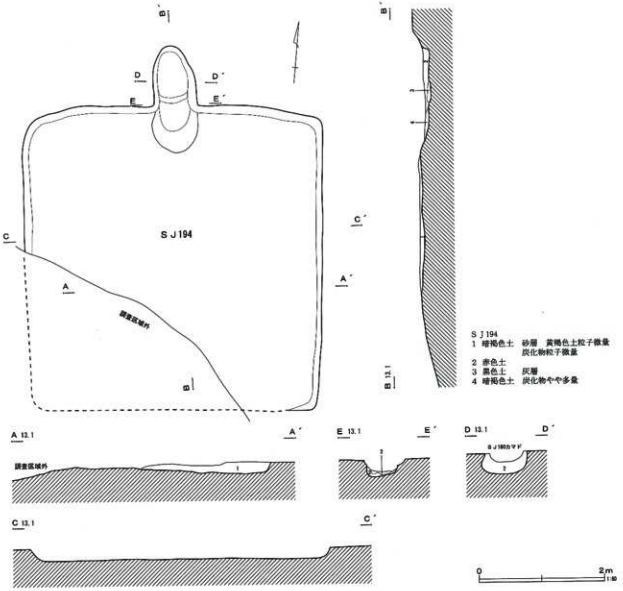
P1は円形で径30×26cm、床面からの深さ8cm、P2は円形で径56×50cm、床面からの深さ26cm、P



第205図　第193号住居跡出土遺物

第83表　第193号住居跡出土遺物観察表（第205図）

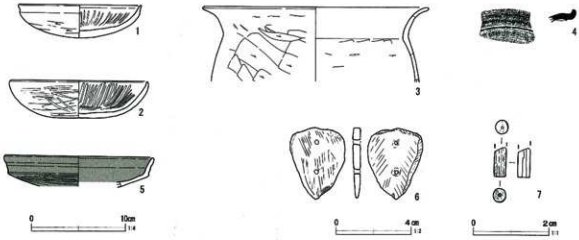
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	4.4	－	27.7	10	埼玉～群馬	角	普通	橙		
2	土師器	坏	(14.0)	3.8	－	67.2	15	群東		普通	橙		
3	土師器	坏	11.2	4.0	－	224.0	95	栃南	角	普通	にぶい黄橙	漆付着	188－8
4	土師器	甕	14.7	16.6	7.5	1200.1	95	茨西	角	普通	にぶい黄橙	カマド左脇	187－2
5	土師器	甑	13.8	11.8	－	403.9	75	茨西	雲	普通	橙	カマド左脇	211－4
6	土師器	甕	14.0	7.7	－	286.1	20	栃南	角	普通	灰黄褐		
7	土師器	甕	－	26.7	5.5	1434.5	60		角	普通	にぶい橙	カマド燃焼部	212－1
8	土師器	甑	27.2	29.7	8.5	1770.1	70	埼北	雲、針	普通	橙	カマド右脇	212－2



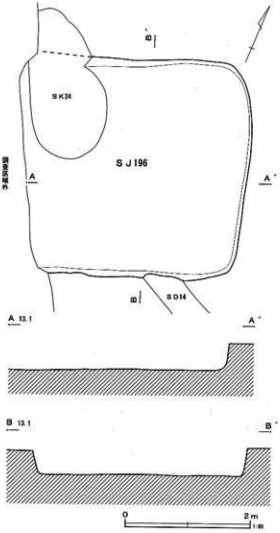
第206図 第194号住居跡

第84表 第194号住居跡出土遺物観察表（第207図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	13.0	3.5	－	140.6	80	埼北		普通	橙	内外面赤彩か	168-9
2	土師器	坏	(14.7)	3.9	－	130.1	50	佐野	雲、角、針	普通	にぶい橙	内外面黒色処理か	168-10
3	土師器	甕	(22.4)	7.9	－	75.9	5	群東	雲	普通	橙		
4	須恵器	壺か	－	1.3	－	15.7	5		針	良好	灰		
5	土師器	坏	(16.0)	3.2	－	42.0	20	群東	角	普通	橙		
6	石製品		孔径(上)0.19×(下)0.20長3.7幅3.0厚0.4重6.2									剣形	234-2
7	石製品	管玉	径0.61孔径0.10×0.15長1.52重0.91										234-2



第207図　第194号住居跡出土遺物



第208図　第196号住居跡

3は円形で径32×28cm、床面からの深さ23cm、P4は円形で径33×31cm、床面からの深さ8cmを測る。

図化し得た遺物は、土師器坏・甕・甑の、計8点であった。

遺物の時期は、6世紀第Ⅱ四半期と考えられる。

第194号住居跡（第206・207図）

調査区南側、I－3、J－2・3グリッドに位置する。第180・202・203・218・219・224・236・239・250号住居跡を切っている。

平面形はほぼ方形で、規模は東西4.86m、南北4.75m、確認面からの深さは0.15mを測る。主軸方向はN－8°－Wを指す。第180号住居跡は、本住居跡を拡張した可能性が考えられる。

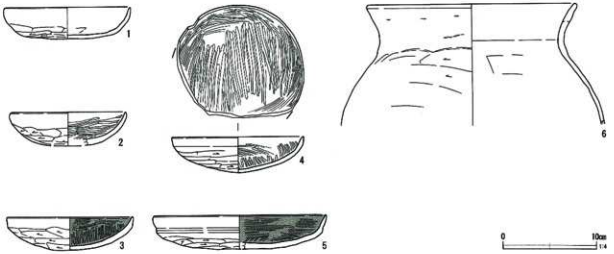
カマドは、北壁の中央に設けられている。袖部は、遺存していなかった。燃焼部は、長さ85cm、幅46cm、床面からの深さは15cm、煙道部は、長さ82cm、幅67cm、確認面からの深さは11cmである。燃焼部は、住居壁面より奥にまで及んでおり、僅かな稜線を経て煙道部に至る。煙道部は、水平面に近い。

カマド以外の施設は、検出されなかった。

図化し得た遺物は、土師器坏・甕のほか、須恵器や石製品など、計7点であった。

遺物の時期は、7世紀末～8世紀第Ⅰ四半期と考えられる。

第196号住居跡（第208・209図）



第209図　第196号住居跡出土遺物

第85表　第196号住居跡出土遺物観察表（第209図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.4)	3.3	－	55.6	30	埼北	角	普通	橙		
2	土師器	坏	(12.4)	3.5	－	48.5	20	栃南	雲、針	普通	橙		
3	土師器	坏	(13.5)	3.5	－	101.4	45	佐野	雲、角、針	普通	にぶい橙		
4	土師器	坏	(14.0)	3.8	－	131.3	55	佐野	雲	良好	にぶい橙	外面赤彩か	169－1
5	土師器	坏	(18.4)	3.6	－	153.8	45	佐野		良好	にぶい黄橙		169－2
6	土師器	甕	(22.2)	12.8	－	974.5	15	埼北	雲、角、針	普通	にぶい黄橙		

調査区南側西寄り、I－2グリッドに位置する。第188・213号住居跡を切り、第14号溝跡、第24号土坑に切られる。

西側部分が調査区外に続くため、平面形は不明である。規模は南北3.38mで、東西は3.65mまでの確認である。確認面からの深さは0.38mを測る。

カマドおよびその他の施設は、確認されなかった。

図化し得た遺物は、土師器坏・甕の計6点であった。

遺物の時期は、7世紀末～8世紀第Ⅰ四半期と考えられる。

第197号住居跡（第210・211・212図）

調査区中央部、G・H－5グリッドに位置する。

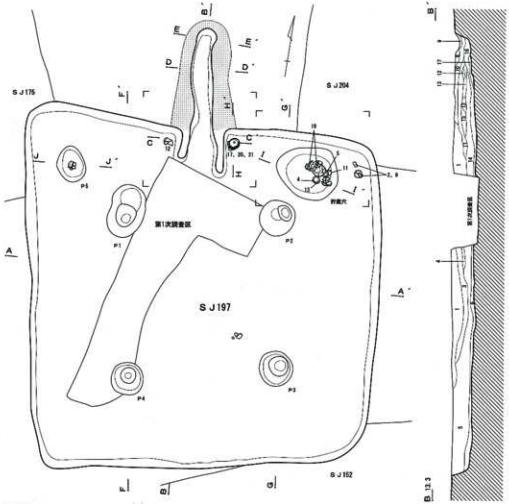
北川辺町教育委員会によって、1979（昭和54）年に実施された、飯積遺跡第1次調査の調査地点は、位置的にはこの住居跡内に該当する。

本住居跡は第210号住居跡を切り、第152・175・204号住居跡に切られている。遺構の遺存度は、比較的良好であった。

平面形は、西壁が長い台形を呈する。本遺構の規模は、東西5.55m、南北4.75mと5.88m、確認面からの深さ0.36mを測る。主軸方向はN－4°－Wを指す。

カマドは、北壁中央に設けられている。掘方に、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された（アミ部分）。この粘質土は、幅10cm程の規模で、煙道部を囲むように充填されていた。但し、掘方底面での、充填土の厚さについては、不明である。袖部は、両袖ともに遺存していた。住居壁面からの残存規模は、左袖55cm、右袖78cmである。燃焼部は、壁面よりも奥にまで及んでいる。規模は、幅42cm、床面からの深さ5cmであり、僅かな稜線を経て煙道部へ続く。煙道部は長さ158cm、幅35cm、確認面からの深さ25cmであり、底面は緩やかな傾斜で煙出し部に至る。

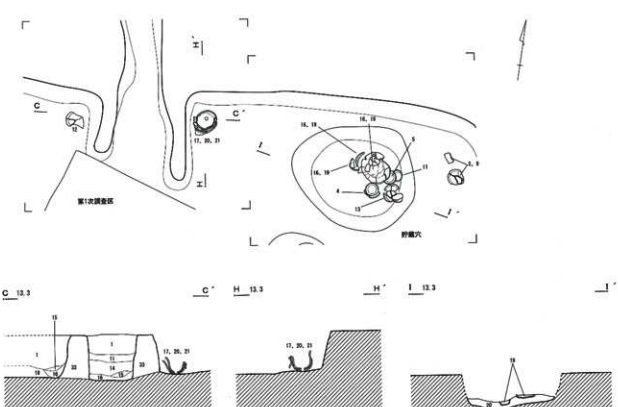
カマド以外の施設としては、貯蔵穴1基と、ピッ



S J 197

1 暗褐色土　炭化物多量　粘性弱
2 明褐色土　炭化物少量　粘性弱
3 黒色土　炭化物集積層
4 赤褐色土　焼土集積層
5 暗褐色土　炭化物多量　粘性強
6 明褐色土　炭化物少量　粘性強
7 暗褐色土　炭化物少量　粘性強
8 暗褐色土　焼土多量
9 暗褐色土　炭化物多量
10 暗褐色土　炭化物ブロック少量
11 暗褐色土　焼土・炭化物多量
12 赤褐色土　焼土層（天井崩落土）煙道部
13 明褐色土　炭化物少量
14 暗褐色土　炭化物少量
15 赤褐色土　焼土集積層
16 黒色土　炭化物集積層
17 暗褐色土　炭化物少量
18 暗褐色土　焼土少量
19 明褐色土　炭化物少量
20 黒色土　炭化物集積層　焼土ブロック少量
21 黒灰色土　粘土質　焼土粒子・炭化物やや多量（柱痕）
22 黒褐色土　焼土ブロック・炭化物少量
23 灰褐色土　炭化物微量
24 黒色土　炭化物少量
25 灰褐色土　粘土粒子少量
26 黒灰色土　粘土粒子少量・炭化物多量
27 暗褐色土　砂質　粘土粒子少量
28 黒褐色土　砂質　粘土粒子・炭化物やや多量
29 暗褐色土　粘土質　焼土粒子・炭化物やや多量（柱痕）
30 赤褐色土　粘土質　焼土粒子・炭化物多量（柱痕）
31 暗褐色土　焼土ブロック・炭化物ブロック多量
32 灰褐色土　炭化物微量
33 灰色土　粘質土ブロック層　カマド袖

第210図　第197号住居跡（1）



第211図　第197号住居跡（2）

ト５基が検出された。貯蔵穴は、北東コーナー付近に設けられていた。この貯蔵穴は、床面精査の時点では検出されず、床面から16cm掘り下げた段階で確認されたものである。平面形は楕円形で、断面形は底部にやや窪みをもつ逆台形を呈する。規模は径100×80cm、床面からの深さは29cmを測る。

Ｐ１は床面では楕円形、底面では円形を呈す、規模は径85×54cm、床面からの深さ34cm、Ｐ２は円形で径56×56cm、床面からの深さ30cm、Ｐ３は円形で径54×53cm、床面からの深さ28cm、Ｐ４は円形で径52×52cm、床面からの深さ37cm、、Ｐ５は楕円形で径58×46cm、床面からの深さ14cmを測る。

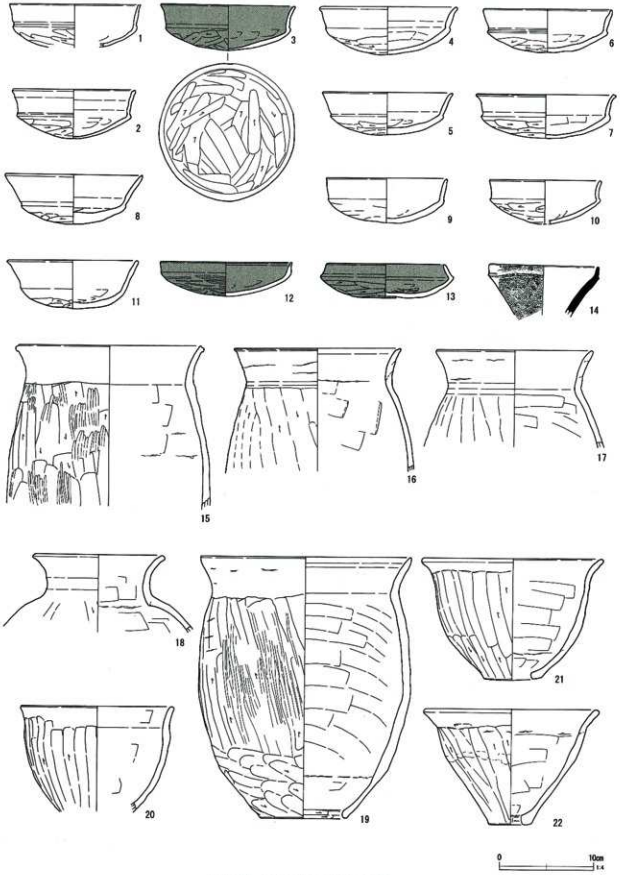
Ｐ１～４は、位置・規模・形状などから、本住居跡の柱穴と考えられる。

遺物は、主にカマドの両袖の脇と、貯蔵穴から出土している。カマド右袖の脇からは、土師器甕の上半部（17）を台として鉢または甑（20）を重ね、さらにその上に甑（21）が重ねられた状態で出土した。貯蔵穴内からは、土師器甑１点・坏５点のほか、土師器甕の上半部が１点出土した。甑は土圧で潰れた状態であった。土師器坏４・13は重なった状態であり、坏５と11は、一部重なった状態であった。土師器甕の上半部である16は、台として用いられた可能性が考えられる。カマド左袖の脇からは、土師器甑が１点出土している。

カマド脇の遺物は床面直上、貯蔵穴内の遺物は底面直上からの出土であった。

図化し得た遺物は比較的多く、土師器坏・甕・甑、須恵器鉢など、合わせて22点である。

遺物の時期は、６世紀第Ⅱ四半期と考えられる。



第212図　第197号住居跡出土遺物

第86表　第197号住居跡出土遺物観察表（第212図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(14.0)	4.6	－	128.6	60	群東		普通	赤褐	P2	169－3
2	土師器	坏	(12.9)	5.2	－	110.2	60	群東	針	良好	橙		169－4
3	土師器	坏	(14.4)	4.8	－	212.9	85	埼北	雲、角、針	良好	にぶい赤褐	貯蔵穴	169－5
4	土師器	坏	14.8	5.1	－	260.7	95	埼北	角	普通	にぶい橙	貯蔵穴	169－6
5	土師器	坏	14.0	4.7	－	239.3	95	群東	角	普通	橙	貯蔵穴	169－7
6	土師器	坏	13.6	4.6	－	153.3	60	群東	針	良好	赤褐	P2	169－8
7	土師器	坏	14.4	4.6	－	148.2	60	埼北	角、針	普通	橙	貯蔵穴	169－9
8	土師器	坏	14.6	5.2	－	256.3	75	茨西	雲	普通	橙	貯蔵穴	169－10
9	土師器	坏	13.0	4.7	－	166.5	75	埼北		普通	にぶい黄橙		170－1
10	土師器	坏	(12.0)	4.7	－	79.0	45	茨西	雲	普通	にぶい褐		
11	土師器	坏	13.6	5.1	－	209.1	90	茨西	角、針	普通	橙	貯蔵穴	170－2
12	土師器	坏	17.8	3.7	－	141.5	75	埼南		普通	黒	カマド左脇	170－3
13	土師器	坏	12.4	3.6	－	202.7	95	佐野	雲	良好	黒	貯蔵穴	170－4
14	須恵器	瓶か	(11.4)	5.2	－	45.1	10		針	良好	灰		
15	土師器	甕	(20.2)	17.2	－	867.2	35	群東	雲	普通	にぶい橙		
16	土師器	甕	17.8	13.1	－	689.4	45	群東	雲	普通	明黄褐	貯蔵穴	187－3
17	土師器	甕	16.8	10.3	－	447.5	15	群東		普通	橙	カマド右脇	187－4
18	土師器	壺	13.6	8.3	－	385.0	15	群東		普通	橙		
19	土師器	甑	22.2	27.4	9.0	2147.7	90	栃南	雲	普通	橙	貯蔵穴	212－3
20	土師器	甑	(16.2)	11.2	－	268.1	35	群東	雲、角	普通	にぶい黄橙	カマド右脇	
21	土師器	甑	18.8	12.8	6.1	812.7	90	群東		良好	橙	カマド右脇　孔径3.5	187－5
22	土師器	甑	(18.6)	12.2	4.6	380.8	40	茨西	針	良好	橙		187－6

第198号住居跡（第213・214・215図）

調査区中央部北東寄り、G－5・6、H－6グリッドに位置する。第113・201・227号住居跡を切り、第139号住居跡、第26号土坑に切られている。

平面形は、やや歪んだ方形を呈する。本住居跡の規模は、東西6.15m、南北6.20m、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方向はN－34°－Wを指す。

カマドは、北西壁のほぼ中央に設けられており、方位はN－39°－Wを指す。袖部は両袖ともが確認されており、住居壁面からの残存規模は、左袖が50cm、右袖が43cmである。燃焼部は、住居壁面より若干奥にまで及んでいる。長さ55cm、幅62cm、床面からの深さ3cm、煙道部は長さ125cm、幅16cm、確認面からの深さ9cmを測る。燃焼部と煙道部には、明瞭な境界はなく、底面は緩やかな傾斜で上がっていく。煙出し部は若干の窪みをもつ。燃焼部と煙道部の底面には、炭が散っていた。

土師器甑（5）は、土圧で潰れた状態で出土した。

遺物の出土は少なく、図化し得たのは土師器坏・甑の、計5点であった。

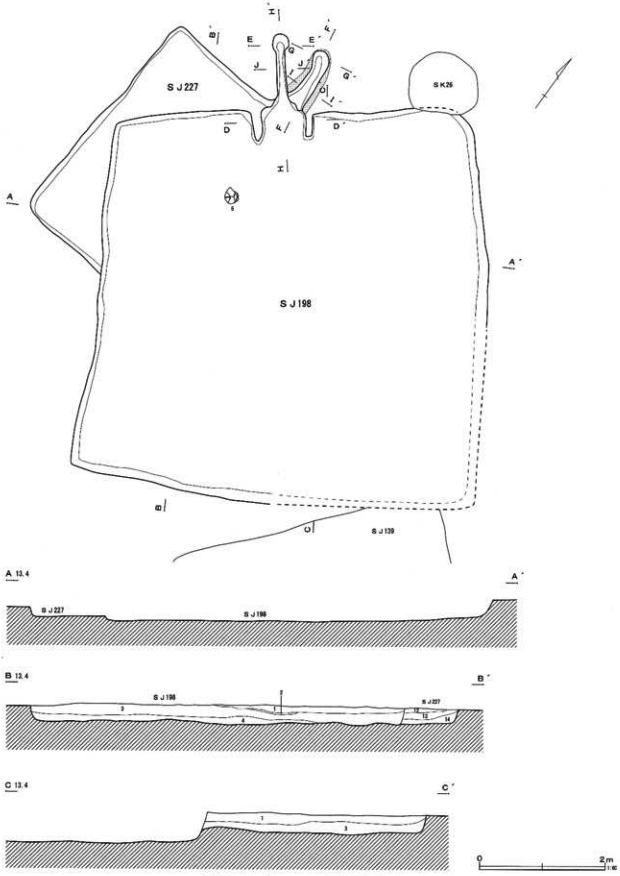
遺物の時期は、6世紀第Ⅲ四半期と考えられる。

第199号住居跡（第216・217・218図）

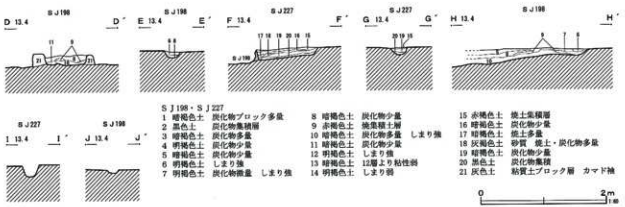
調査区中央部南寄り、H－3、I－3・4グリッドに位置する。第241号住居跡を切り、第118・186・200号住居跡に切られている。

平面形はやや歪んだ長方形で、規模は南北6.61m、東西4.74m、確認面からの深さ0.13mを測る。主軸方向は、N－9°－Wを指す。

カマドは、北壁中央に設けられている。掘方に、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された（アミ部分）。この粘質土は、幅15～56cmの規模で、煙道部を囲むように充填されていた。但し、掘方底面での、充填土の厚さについては不明である。燃焼部は、幅32cm、床面からの深さ6cm、煙道部は長さ175cm、幅40cm、確認面からの深さ27cmを測る。袖部は両袖ともが確認され、住居壁面からの残存規模は、左袖が73cm、右袖が58cmを測る。燃焼部・煙道部とも平坦面に近く、煙出し部で若干



第213図　第198・227号住居跡（1）



第214図 第198・227号住居跡（2）

の窪みをもつ。また両部分ともに、被熱による壁面の赤色硬化は比較的顕著であった。

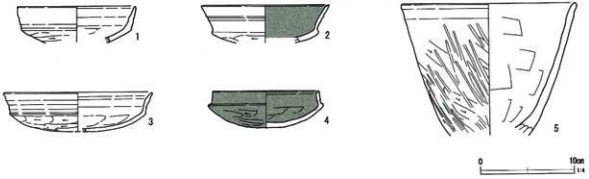
カマド以外の施設としては、貯蔵穴とピットが、1基ずつ検出されている。貯蔵穴は、北東コーナー部分にあり、平面形は円形を呈する。規模は70×65㎝、床面からの深さ37㎝を測る。

P1は円形で径65×56㎝、床面からの深さ54㎝を測る。

また周壁溝が、北東コーナーと北壁と西壁において、部分的に検出された。規模は、幅5～45㎝、床面からの深さ10～12㎝である。

遺物の大部分は、貯蔵穴周辺より出土した。カマド右袖の脇から出土した土師器甕（8）は、破片の一部がカマド燃焼部付近から出土しているものの、他の部分は床面に自立した状態で検出されている。カマド左袖手前で検出された甕（6）は、土圧で押し潰された状態で出土した。これらの他に、支脚1点（11）がカマド燃焼部から、貯蔵穴周辺からは、土師器坏（2・3）・甑（9）が、カマド左袖付近からは、土師器甕（5）が出土している。

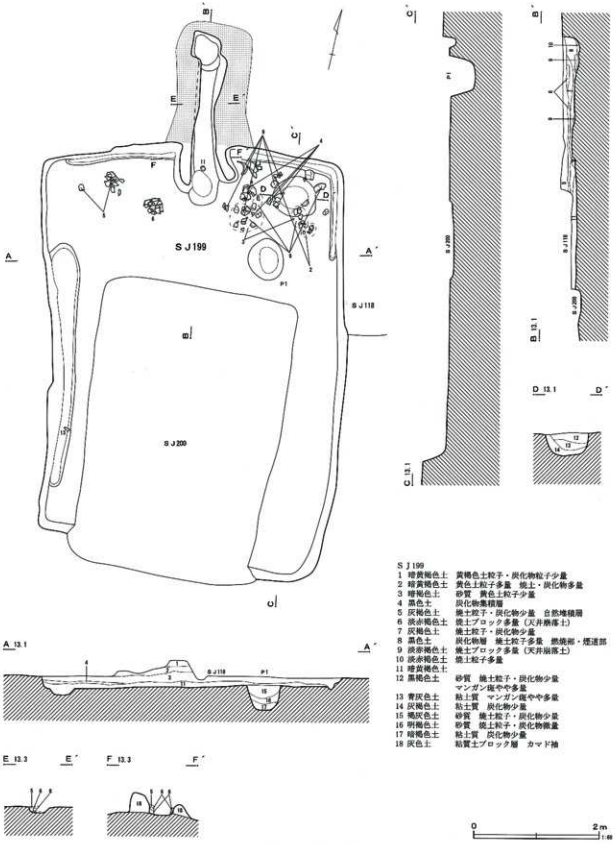
図化し得た遺物は比較的多く、土師器坏・甕・甑のほか、土製支脚、砥石などを合わせ計13点であっ



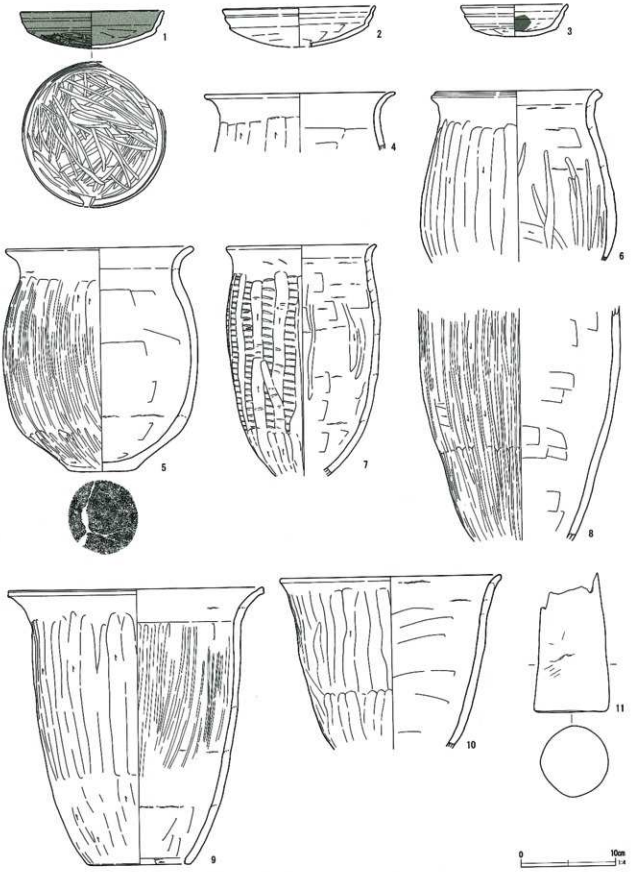
第215図 第198・227号住居跡出土遺物

第87表 第198・227号住居跡出土遺物観察表（第215図）

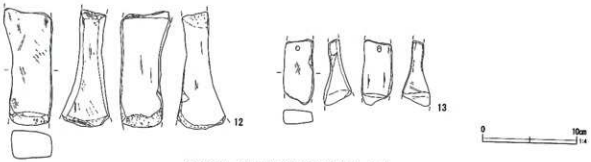
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.4)	3.8	－	37.7	15	群東		普通	褐		
2	土師器	坏	(13.6)	4.0	－	32.6	10	埼北	雲、針	良好	にぶい黄橙	漆付着	
3	土師器	坏	(15.8)	4.1	－	53.2	20	埼北	雲、針	普通	灰黄		
4	土師器	坏	(11.2)	3.9	－	72.6	40	埼北	角、針	普通	黒	掘り方	
5	土師器	甑	18.4	13.8	－	848.5	85	栃南		普通	にぶい黄橙		188-1



第216図 第199号住居跡



第217図　第199号住居跡出土遺物（1）



第218図　第199号住居跡出土遺物（2）

第88表　第199号住居跡出土遺物観察表（第217・218図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	15.3	3.9	－	194.7	85	群東	雲	良好	にぶい橙		
2	土師器	坏	(16.0)	4.6	－	93.7	20	群東		普通	にぶい褐		
3	土師器	坏	(11.4)	3.4	－	59.5	40	埼北		普通	橙		
4	土師器	甕	(20.2)	6.2	－	251.6	10	群東	雲	普通	にぶい褐	貯蔵穴	
5	土師器	甕	(19.6)	23.5	7.1	1582.6	55	茨西		普通	にぶい黄橙	貯蔵穴,P1	212－4
6	土師器	甕	(17.2)	18.1	－	1183.2	25	茨西		普通	にぶい黄橙		188－2
7	土師器	甕	15.6	24.3	－	1335.0	80	栃南	雲,針	普通	灰黄褐	被熱強	213－1
8	土師器	甕	－	24.8	－	1452.2	35	茨西	角,針	普通	橙		
9	土師器	鉢	27.0	29.0	9.9	1534.5	40	群東	角	普通	にぶい黄橙	貯蔵穴	213－2
10	土師器	鉢	(23.2)	18.3	－	705.5	30	茨西	角	普通	橙	貯蔵穴,P1	
11	土製品	支脚	－	14.7	7.8	890.5	80	群西か			灰黄褐	カマド　被熱	
12	石製品	砥石	長12.3幅5.2厚5.0重338.0								浅黄	砂岩製	235－1
13	石製品	砥石	孔径0.3×0.4長(5.9)幅(3.3)厚(3.0)重61.5								灰	砂岩製	235－1

た。

遺物の時期は、6世紀第Ⅲ四半期と考えられる。なお11は、7世紀第Ⅳ四半期の土師器坏であり、混入と推測される。

第200号住居跡（第219・220図）

調査区南側中央寄り、I－3グリッドに位置する。第186・199・241・246号住居跡を切り、第118号住居跡に切られている。

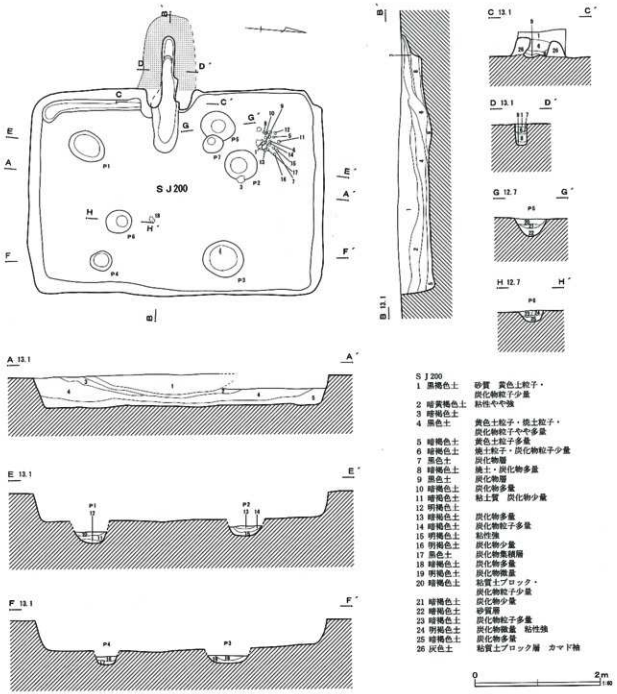
平面形は隅丸長方形で、規模は東西4.65m、南北3.20m、確認面からの深さ0.52mを測る。主軸方向はN－87°－Eを指す。

カマドは、西壁のやや南寄りに設けられている。掘方内には、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された（アミ部分）。この粘質土は、幅35cm前後の規模で、煙道部を囲むように充填されていた。但し、掘方底面での充填土の厚さについては不明である。袖部は、両袖ともが確認された。住居壁面からの残存規模は、左袖が47cm、右袖が36cmである。燃焼部は、床面から7cm程低い皿状に窪み、僅かな稜線を経て煙道部へと続く。煙道部は、緩やかな傾斜で上がり、段をもって煙出しに至る。燃焼部と煙道部を含めた長さは182cm、煙道部は幅20cm、確認面から深さ14cmを測る。

カマド以外の施設としては、ピットが7基検出された。P1～P4は、床面精査の時点では検出されず、床面から9～17cm掘り下げた段階で確認されたものである。

P1は楕円形で径60×46cm、床面からの深さ35cm、P2は円形で径50×48cm、床面からの深さ27cm、P3は円形で径65×58cm、床面からの深さ22cm、P4は円形で径35×32cm、床面からの深さ24cm、P5は楕円形で径55×43cm、床面からの深さ27cm、P6は円形で径42×38cm、床面からの深さ18cm、P7は円形で径33×30cm、床面からの深さ40cmを測る。

土師器坏1点（1）と、その付近に軽石13点が比較的まとまった状態で出土した。



第219図　第200号住居跡

図化し得た遺物は、土師器坏・高坏のほか、須恵器甕の破片、軽石製品など14点を含め、計18点であった。

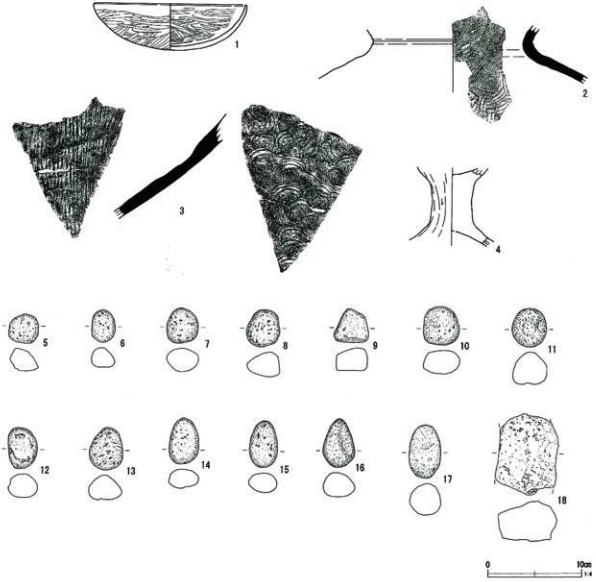
遺物の時期は、7世紀末～8世紀第Ⅰ四半期と考えられる。

第201号住居跡（第221・222図）

調査区北東部中央寄り、G・H－6グリッドに位置する。第139・198・251・260号住居跡に切られている。

平面形は台形で、規模は長軸6.05m、短軸5.68m、確認面からの深さ0.40mを測る。主軸方向は、N－22°－Wを指す。

カマドは、北壁のやや西寄りに設けられている。このカマドは、煙出し部の内側が、被熱により赤色



第220図　第200号住居跡出土遺物

硬化したドーナツ状に検出され、煙道部には、被熱により赤色硬化した天井部が遺存していた。カマドの方位は、N－13°－Wである。

袖部は、両袖ともに確認されており、住居壁面からの残存規模は、左袖が100㎝、右袖が108㎝である。燃焼部は、床面よりも８㎝ほど高くなっており、煙道部と合わせほぼ水平であるが、煙出し部に至って急激に立ち上がる。幅は、燃焼部で32㎝、煙道部では20～25㎝、燃焼部と煙道部を合わせた長さは、265㎝を測る。燃焼部と煙道部の壁面も、被熱による赤色硬化が顕著であり、焚口部付近では被熱のため、床面が黒褐色に硬化していた。

図化し得た遺物は、土師器坏・高坏・壺・甕・甑のほか、支脚を含め計13点であった。なお13については、脚台部の先端部付近に丸味をもっていた。この点から、高坏の坏部が欠損したものを転用したのではなく、支脚として造られた脚台部と推測される。

遺物の時期は、５世紀第Ⅲ四半期と考えられる。

第202号住居跡（第223・224図）

調査区南側、I－３、J－２・３グリッドに位置する。南西コーナー部分は調査区外に続いている。第224・236号住居跡を切り、第180・194・219・239号

第89表　第200号住居跡出土遺物観察表（第220図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	16.2	4.2	－	195.6	80	栃南	雲、軽、針	普通	橙		170－5
2	須恵器	甕	－	5.7	－	101.9	5		針	良好	灰		
3	須恵器	甕	－	11.2	－	332.7	5			普通	灰		
4	土師器	高坏	－	8.2	－	193.4	20	茨西	雲	普通	にぶい黄		
5	石製品	－	長3.1幅3.0厚2.4重10.3									軽石製	235－2
6	石製品	－	長3.4幅2.5厚2.1重10.1									軽石製	235－2
7	石製品	－	長3.7幅3.4厚2.5重15.6									軽石製	235－2
8	石製品	－	長3.9幅3.6厚2.6重14.8									軽石製	235－2
9	石製品	－	長(3.7)幅(3.6)厚(2.4)重16.5									軽石製	235－2
10	石製品	－	長4.1幅3.9厚2.5重18.1									軽石製	235－2
11	石製品	－	長4.0幅3.6厚3.3重24.8									軽石製	235－2
12	石製品	－	長4.3幅3.1厚2.5重16.9									軽石製	235－2
13	石製品	－	長4.4幅3.5厚2.6重24.3									軽石製	235－2
14	石製品	－	長4.3幅3.2厚2.0重17.4									軽石製	235－2
15	石製品	－	長4.9幅3.0厚2.1重13.3									軽石製	235－2
16	石製品	－	長5.0幅3.4厚2.5重19.9									軽石製	235－2
17	石製品	－	長5.1幅3.3厚3.3重34.3									軽石製	235－2
18	石製品	－	長8.5幅6.7厚4.2重128.3									軽石製	235－2

住居跡に切られている。

平面形は長方形で、規模は東西4.85m、南北3.93m、確認面からの深さ0.38mを測り、主軸方向はN－27°－Wを指す。

カマドは、北壁中央に設けられている。袖部は、両袖ともに確認されており、住居壁面からの残存規模は左袖が45cm、右袖が46cmである。燃焼部は、住居壁面の奥にまで及んでいる。平面形は楕円形を呈し、規模は53×50cm、床面からの深さは12cmである。燃焼部は、壁面・底面ともに、被熱による赤色硬化が顕著であった。燃焼部底面では、焼土・炭・灰などからなる層が、厚い部分では10cm近く堆積していた。さらに、焚口部手前においても、被熱による赤色硬化が認められるとともに、焼土や灰が分布していた。燃焼部と煙道部を合わせた長さは95cmを測る。

カマド以外の施設としては、ピットが1基検出された。P1は楕円形で、長径61×短径48cm、床面からの深さ22cmを測る。

カマド燃焼部内から、土師器坏3点（1～3）が、伏せた状態で、重なって出土した。

図化し得た遺物は、上記の土師器坏と、土師器甕など、計4点であった。

遺物の時期は、6世紀第Ⅰ四半期と考えられる。

第203号住居跡（第225・226図）

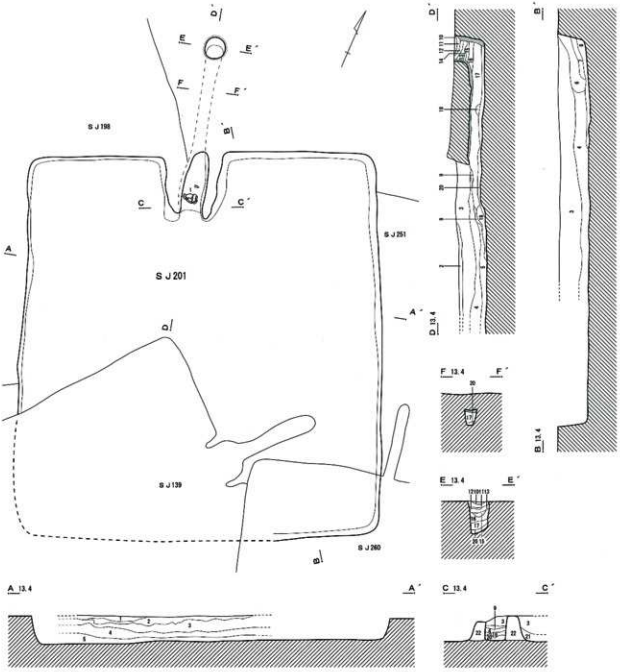
調査区南側、I－2・3グリッドに位置する。第189・211・219・243・250・258号住居跡を切り、第187・194号住居跡、第14号溝跡に切られている。なお、第189号住居跡と重複関係にあるが、当初、平面的にも断面的にも識別できなかった。しかし、床面の検出時点において、地山との色調・土質の違いから、第189号住居跡の東隣に本住居跡を設定した。

平面形は推定プランからみる限り、やや歪んだ長方形を呈する。規模は東西4.35m、南北3.9m、確認面からの深さ0.5mを測り、主軸方向はN－0°または、N－90°－Wを指すと推測される。

カマドおよび、その他の施設は確認されなかった。住居の中央部分から、北東～南東コーナー付近にかけては床面の硬化が顕著であった。またこの範囲内では、炭化物が分布しているのが確認された。

図化し得た遺物は土師器坏・甕・甑・高坏、ミニチュア土器の、計7点である。

遺物の時期は、6世紀第Ⅲ四半期と考えられる。なお、7は5世紀代の高坏脚部であり、本住居跡が切っている、第243号住居跡の遺物が混入した可能



第221図　第201号住居跡

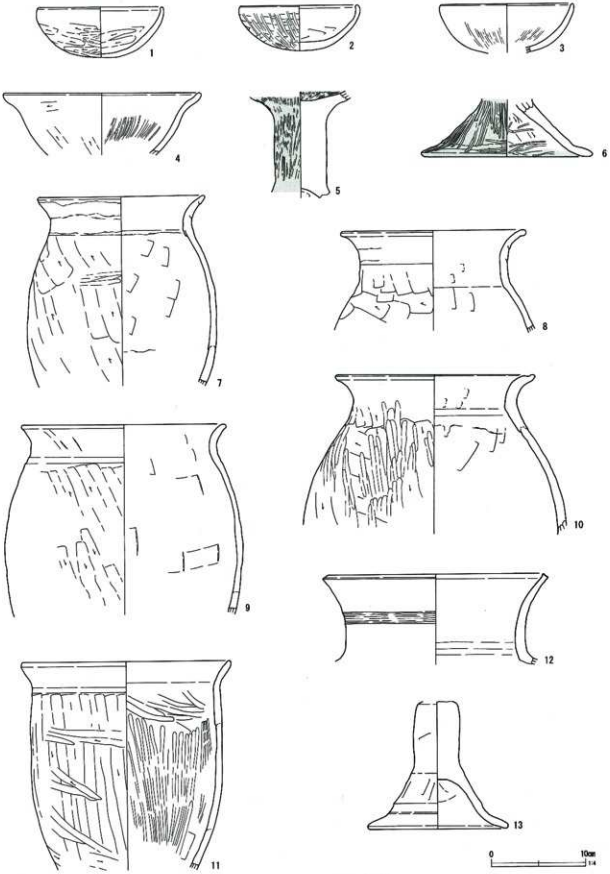
性も考えられる。

第204号住居跡（第227・228図）

調査区中央部、G－5グリッドに位置する。第197・210号住居跡を切り、第93号住居跡に切られている。

平面形は、台形に近い長方形を呈し、規模は東西4.28m、南北3.80m、確認面からの深さ0.37mを測り、主軸方向は、S－83°－Wを指す。

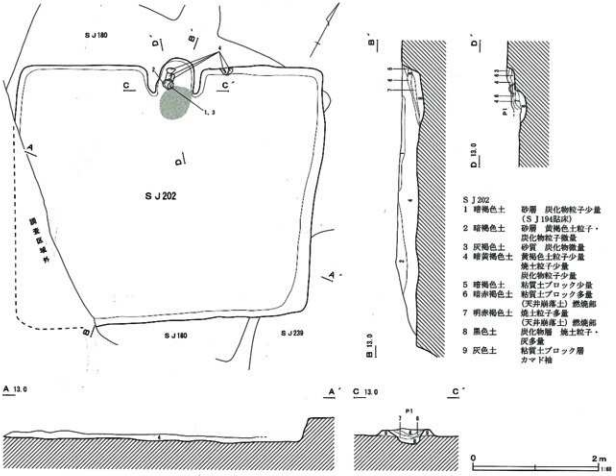
カマドは、東壁のやや南寄りに設けられている。カマドの遺存度は低いものの、両袖ともに検出され



第222図　第201号住居跡出土遺物

第90表　第201号住居跡出土遺物観察表（第222図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	13.2	5.3	－	205.4	80	茨西	雲、角	普通	橙	カマド	170−6
2	土師器	坏	(12.4)	4.7	－	131.0	40	茨西	角、針	普通	橙		170−7
3	土師器	椀	(14.0)	5.2	－	84.2	20	茨西	角、針	普通	にぶい黄橙		
4	土師器	高坏	(21.0)	6.6	－	200.2	20	栃南		普通	浅黄	内外面赤彩か　被熱	188−3
5	土師器	高坏	－	11.3	－	586.0	20	栃南	雲、角、針	普通	橙		
6	土師器	高坏	－	5.5	18.2	450.6	10	栃南	角	良好	明赤褐		188−4
7	土師器	甕	17.8	20.1	－	770.0	35	群東	角	普通	赤褐	赤彩か	188−5
8	土師器	甕	19.8	10.9	－	296.8	20	茨西	雲、角	良好	にぶい黄橙		
9	土師器	甕	(21.4)	20.0	－	341.7	10	栃南	雲、角	普通	にぶい黄橙		
10	土師器	甕	21.2	16.9	－	1130.0	40	茨西	角	普通	にぶい黄橙		188−6
11	土師器	甑	(22.0)	21.9	－	1345.7	25	群東	雲、角、針	普通	にぶい黄橙		189−1
12	土師器	壺	(27.8)	9.5	－	206.9	5	群東		普通	橙	内外面赤彩か	
13	土製品	支脚	－	13.5	(14.6)	335.9	55	栃南	雲、針	良好	明黄褐		189−2



第223図　第202号住居跡

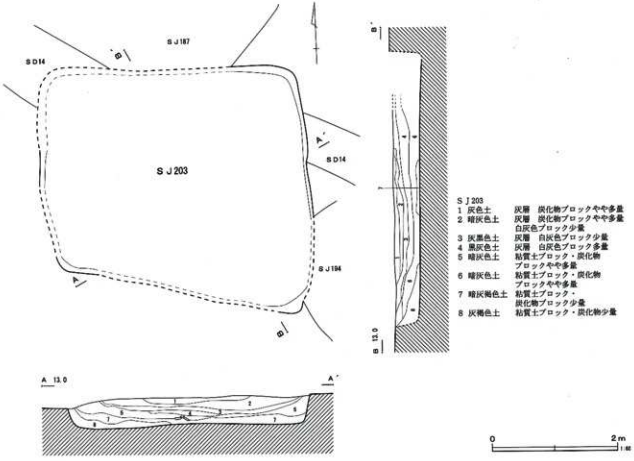
ている。住居壁面からの遺存規模は、左袖が22cm、右袖が20cmである。燃焼部は、床面から3cm窪む程度であり、煙出し部に向かって僅かに上がるのみである。燃焼部と煙道部を合わせた長さは185cm、確認面からの深さは27cmである。煙道部壁面には、被熱による赤色硬化が確認された。

カマド以外の施設としては、ピットが4基検出されている。4基とも床面精査の時点では検出されず、床面から14～20cm掘り下げた段階で確認できたものである。

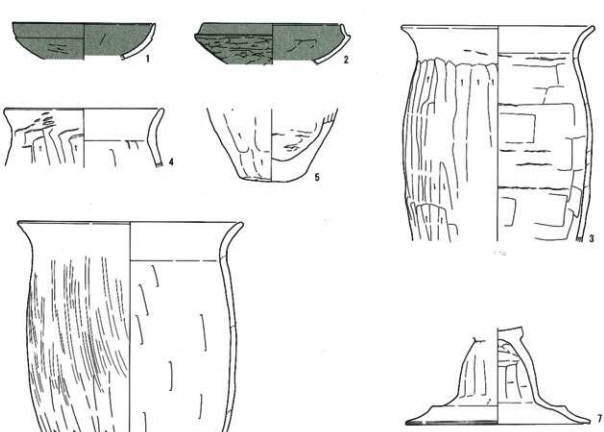
第224図　第202号住居跡出土遺物

第91表　第202号住居跡出土遺物観察表（第224図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.0)	4.5	－	61.4	25	群東	角	良好	にぶい橙	カマド燃焼部	
2	土師器	坏	13.2	4.7	－	170.1	100	群東	雲、角、針	普通	明赤褐	カマド燃焼部	170－8
3	土師器	坏	(13.4)	4.7	－	52.8	30	群東	角、針	普通	橙	カマド燃焼部	
4	土師器	甕	15.8	20.6	－	1025.5	45	茨西		普通	にぶい黄橙	カマド燃焼部	189－3



第225図　第203号住居跡



第226図　第203号住居跡出土遺物

第92表　第203号住居跡出土遺物観察表（第226図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(15.2)	3.8	－	55.0	20	茨西		普通	灰白		
2	土師器	坏	(14.6)	4.4	－	109.2	30	埼南	角	普通	黒		
3	土師器	甕	(20.0)	22.7	－	1020.4	35	埼南		普通	橙	4層、5層	
4	土師器	甕	(16.6)	6.2	－	75.6	5	埼南	角	良好	にぶい黄橙	2層	
5	土製品	ミニチュア	－	3.8	3.9	42.7	30	茨西		普通	にぶい黄橙		
6	土師器	甑	23.6	31.1	9.7	1428.9	65	埼南	雲、角	普通	にぶい黄橙	3層・4層	213-3
7	土師器	高坏	－	10.2	(19.5)	463.2	40	群東		良好	橙	5層	

P1は楕円形で径40×30cm、床面からの深さ38cm、P2は円形で径43×37cm、床面からの深さ30cm、P3は円形で径28×26cm、床面からの深さ43cm、P4は円形で径40×40cm、床面からの深さ44cmである。

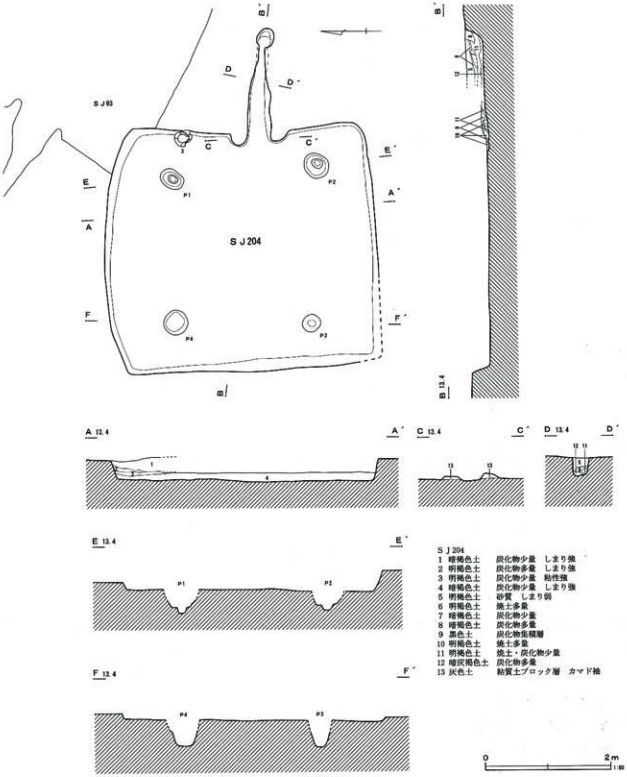
土師器甕（3）の上半部が、東壁に寄りかかるように、口縁を斜め上に向けた状態で出土した。

図化し得た遺物は、土師器坏・甕のほか、ミニチュア土器など、計5点であった。

遺物の時期は、7世紀第Ⅳ四半期と考えられる。

第207号住居跡（第229・230図）

調査区西側、G・H－1・2グリッドに位置する。第174・177・192号住居跡に切られている。平面形

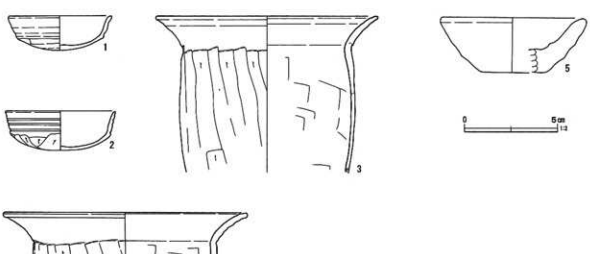


第227図 第204号住居跡

は台形で、規模は東西5.17m、南北4.48m、確認面からの深さ0.38mを測り、主軸方向はN－0°を指す。

カマドは確認されなかった。

カマド以外の施設としては、ピットが4基検出された。4基とも床面精査の時点では検出されず、床面から8～13cm掘り下げた段階で確認できたものである。



第228図　第204号住居跡出土遺物

第93表　第204号住居跡出土遺物観察表（第228図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(10.8)	3.6	－	48.9	25	埼北	角	普通	灰白		
2	土師器	坏	(11.8)	4.2	－	99.9	60	埼北	角	普通	にぶい橙		170−9
3	土師器	甕	23.2	16.4	－	771.5	40	埼北	雲、角	普通	にぶい橙		189−4
4	土師器	甕	(27.0)	6.9	－	121.4	5	埼北	角	普通	にぶい黄橙		
5	土製品	ミニチュア	(7.6)	2.9	(3.4)	14.9	20		雲、角	普通	浅黄		

P1は円形で径42×37cm、床面からの深さ29cm、P2は円形で径42×38cm、床面からの深さ31cm、P3は円形で径46×40cm、床面からの深さ20cm、P4は円形で径53×52cm、床面からの深さ25cmである。

図化し得た遺物は、土師器坏、須恵器蓋・甕など、合わせて計13点であった。なお、12は大型高坏の蓋である。

時期は、6世紀第Ⅳ四半期と考えられる遺物が出土しているが混入と思われる。

第208号住居跡（第231・232図）

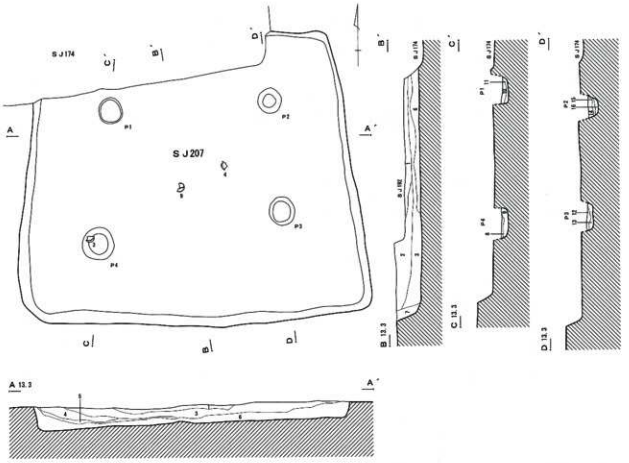
調査区西側、H－2グリッドに位置する。第226・232・242・257号住居跡を切り、第165・169・172・209号住居跡に切られている。

平面形は隅丸正方形で、規模は東西5.42m、南北4.98m、確認面からの深さ0.40mを測り、主軸方向はN－20°－Eを指す。

北側壁面に、本住居跡の掘方が検出された。この掘方は、北壁全体に及んでおり、カマド際で最も奥行きが深く、45cm程奥まで掘り込まれている。この掘方内に、明褐灰色粘土ブロック混じりの土を充填して、壁面を構築している。この充填土は、硬く突き固められた状態であった。その他の壁面では、こうした掘方は確認されなかった。

カマドは、北壁のやや西寄りに設けられている。このカマド掘方には、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された（アミ部分）。この粘質土は、幅6～32cm程の規模で、煙道部を囲むように充填されていた。但し、掘方底面での充填土の厚さについては不明である。

遺存度は低いものの、両袖ともが確認された。住居壁面からの遺存規模は、左袖が62cm、右袖が80cmである。燃焼部・煙道部底面は、床面と高低差がなく、ほぼ水平である。煙道部底面は、端部で深さ8cm程のピット状に窪み、段を経て煙出しに至る。燃



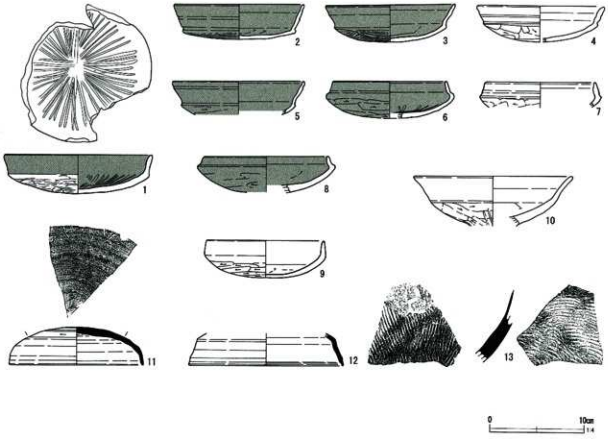
S J 207
1 暗褐色土　砂質　黄褐色砂質土ブロック少量
　焼土ブロック少量　炭化物多量
2 褐色土　砂質　焼土粒子多量　炭化物少量
3 褐色土　シルト質　焼土粒子多量　炭化物多量
4 黄褐色土　炭化物粒子少量　粘性強　粒子細かい
5 黒色土　炭化物層　粘性強　粒子粗い
6 明褐色土　砂質　上層に炭化物集積層少量混じる
7 褐色土　砂質　焼土粒子・炭化物微量
8 黒色土　炭化物集積層
9 暗褐色土　炭化物ブロック少量
10 明褐色土　炭化物少量　粘性強
11 明褐色土　炭化物少量
12 暗灰褐色土　炭化物極く多量
13 明褐色土　炭化物少量　粘性強
14 暗褐色土　炭化物少量　粘性強
15 暗褐色土　砂質
16 明褐色土　炭化物微量　粘性強

0　2m
1:60

第229図　第207号住居跡

第94表　第207号住居跡出土遺物観察表（第230図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(15.4)	4.1	－	160.9	55	佐野	雲	普通	褐灰		170－10
2	土師器	坏	(13.8)	3.2	－	87.6	25	群東	雲、針	良好	黒	掘り方	
3	土師器	坏	(13.8)	3.9	－	78.3	40	群東	角、針	良好	橙		
4	土師器	坏	13.2	3.8	－	67.7	30	埼北	角	普通	にぶい黄橙		
5	土師器	坏	(13.8)	3.5	－	16.4	5	群東	角	普通	灰黄褐		
6	土師器	坏	(12.0)	3.9	－	53.8	25	埼北	雲、角、針	良好	明赤褐		
7	土師器	坏	(11.4)	2.7	－	18.4	5	佐野	雲	普通	にぶい黄橙		
8	土師器	坏	(13.2)	3.8	－	55.2	20	埼北	角	良好	黒		
9	土師器	坏	12.6	4.0	－	208.0	95	群馬～栃木		普通	橙		171－1
10	土師器	高坏	(16.8)	5.3	－	88.9	5	佐野	雲	普通	にぶい橙		
11	須恵器	蓋	－	4.0	(14.0)	79.1	20	管ノ沢か		普通	灰		
12	須恵器	蓋	－	3.4	(16.4)	24.9	10		雲、針	普通	灰	P15	
13	須恵器	甕	－	7.6	－	126.9	5	管ノ沢か	雲	普通	灰		



第230図　第207号住居跡出土遺物

焼部と、煙道部を含めた長さは220cmである。燃焼部・煙道部壁面は、比較的良く焼けた状態であった。

カマド以外の施設としては、ピットが5基検出された。その内の2基（P1・P3）は、床面精査の時点では検出されず、床面から7～10cm掘り下げた段階で確認されたものである。

P1は楕円形で径48×40cm、床面からの深さ26cm、P2は楕円形で径70×55cm、床面からの深さ16cm、P3は楕円形で75×60cm、床面からの深さ22cmである。

焚口手前から土師器甕2点（5・6）、カマド右袖付近から土師器甑1点（7）が出土した。

図化し得た遺物は、土師器坏・甕・甑・壺、ミニチュア土器、土玉、貝巣穴痕泥岩のほか、桃と思われる種子等を含め、計15点であった。

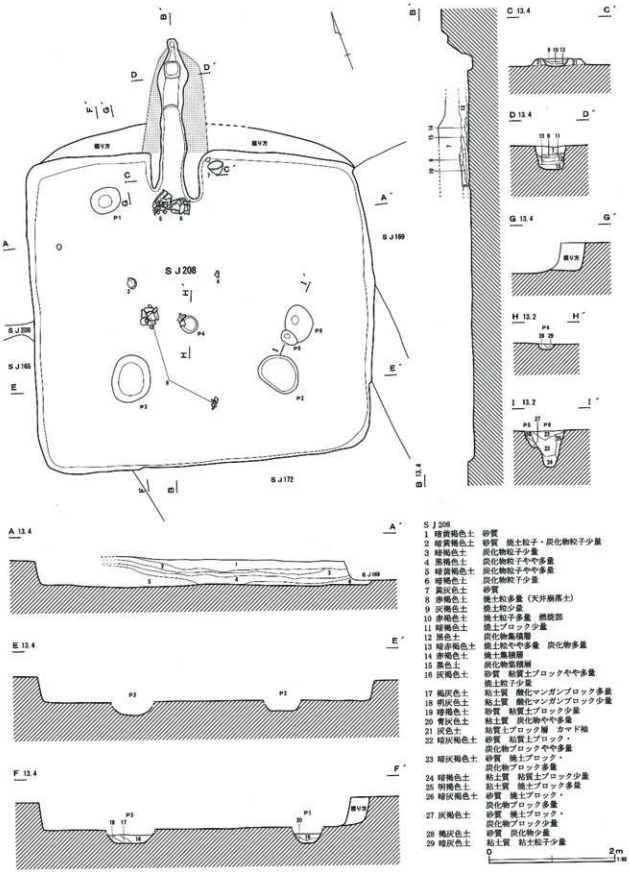
なお、第172号住居跡のカマドは、本住居跡の覆土を掘り込んで構築されていたことから、前者が新しいといえる。しかし、本住居跡からは6世紀第Ⅲ四半期の遺物が出土しているのに対し、第172号住居跡からは6世紀第Ⅱ四半期の遺物が出土している。この点については、土器の時期幅の中での誤差と考えたい。

第209号住居跡（第233・234図）

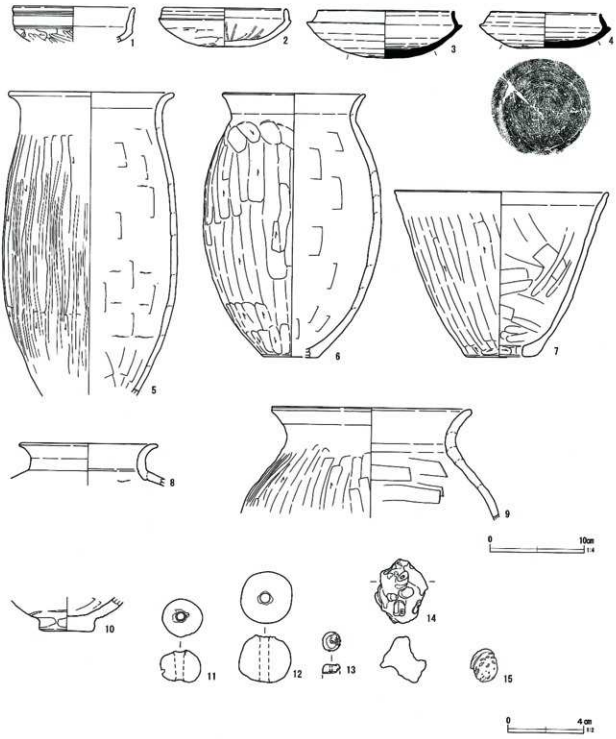
調査区西部、H－1・2グリッドに位置する。第208・226・232号住居跡を切る。第165号住居跡には、切られていると思われる。第213・226号住居跡との重複関係は不明である。遺構の遺存部分が小さいため、平面形・規模・主軸方向は不明である。確認面からの深さは0.35mである。

カマドおよび、その他の施設は確認されなかった。

須恵器・土師器のほか土玉など合わせて、図化し得た遺物は6点であった。



第231図　第208号住居跡



第232図　第208号住居跡出土遺物

遺物の時期は、7世紀第Ⅳ四半期と考えられる。なお5は、5世紀末の土師器坏であり、混入と推測される。

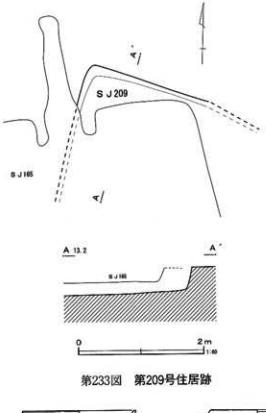
第210号住居跡（第235・236図）

調査区中央部、F・G－5グリッドに位置する。第93・197・204号住居跡に切られている。平面形は長方形で、規模は南北5.33m、東西4.53m、確認面からの深さ0.38mを測る。主軸方向は、N－3°－Eを指す。

カマドは、2基検出されている。精査の結果、カ

第95表　第208号住居跡出土遺物観察表（第232図）

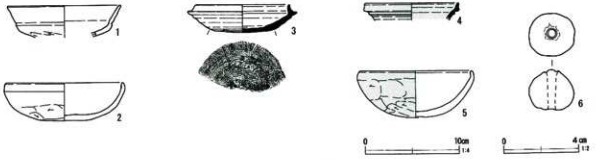
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.0)	3.7	－	30.1	15	太田	角	良好	淡黄		
2	土師器	坏	(13.8)	4.1	－	85.1	25	栃南	雲	普通	にぶい黄橙		
3	須恵器	坏	14.3	5.0	－	205.8	65	東海		普通	灰白		171－2
4	須恵器	坏	(11.6)	3.8	－	157.6	60	管ノ沢か		普通	灰	ヘラ記号	171－3
5	土師器	甕	16.4	31.9	－	1740.9	75	埼北		普通	にぶい黄褐	カマド焚口前	213－4
6	土師器	甕	14.8	27.8	(5.6)	1911.5	80	群東	雲	普通	にぶい黄橙	カマド焚口前	214－1
7	土師器	甑	22.4	17.5	7.5	1165.0	95	栃南	雲	普通	橙	孔径5.0　黒斑あり	189－5
8	土師器	壺	(14.2)	4.5	－	127.0	5	比企	雲	普通	橙		
9	土師器	甕	21.0	11.5	－	1758.0	25	茨西	雲	普通	浅黄		
10	土製品	ミニチュア	－	1.8	2.9	18.9	35		雲、角	普通	にぶい黄橙		
11	土製品	土玉	径2.1孔径0.5厚1.7重6.4残95						雲	普通	橙		233－1
12	土製品	土玉	径2.7孔径0.5厚2.5重18.1残100						雲	普通	灰黄褐		233－2
13	土製品	土玉	径1.0孔径0.1厚0.5重0.5残50							普通	黒		234－1
14	鉄製品		長3.3幅2.6厚2.3重8.1								にぶい橙	16孔、被熱罰	238－1
15	種子	桃	長1.7幅1.4厚0.5重0.6				40				黒	桃の実、炭化により黒色化	236－5



第233図　第209号住居跡

マド1の燃焼部は、底面に炭や焼土を残したまま床面の高さまで埋め戻され、その上にカマド2の左袖が構築されていることが判明した。この点から2基は併用されたものではなく、カマド1が初めに設けられ、後ほどやや右（東）寄りにカマド2が新たに構築されたいえる。

カマド1は、北壁中央よりやや東寄りに設けられ、方位はN－3°－Eである。既述のように、両袖とも残っておらず、撤去されていた。残存規模は、住居壁面から煙出し部までの長さ105cm、幅25～40cm、確認面からの深さ27～32cmを測る。燃焼部は、床面より5～10cm程、皿状に掘り窪められている。燃焼部は、住居壁面より奥にまでは及んではいない。燃



第234図　第209号住居跡出土遺物

第96表　第209号住居跡出土遺物観察表（第234図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	3.3	－	43.8	15	埼北	雲、角	普通	橙		
2	土師器	坏	12.6	4.0	－	51.9	25	栃南		普通	橙		
3	須恵器	坏	(9.8)	2.9	－	48.2	40	東海か		普通	灰白		171－4
4	須恵器	甕	(10.0)	1.8	－	3.2	5	東海		普通	灰白		
5	土師器	埴	(11.8)	4.9	(1.8)	79.6	20	栃南	角	良好	にぶい黄橙		
6	土製品	土玉	径2.4孔径0.5厚2.1重10.8残100							普通	黒		233－2

焼部から煙道部は、きわめて緩やかな傾斜で煙出し部へと上がっていく。燃焼部～煙道部にかけて、底面には炭が分布していたが、被熱による赤色硬化は顕著ではなかった。

カマド２は、両袖とも遺存していた。煙出し部は、内側が被熱した円形のプランとして検出された。カマド掘方には、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された（アミ部分）。この粘質土は、幅11～44cm程の規模で、煙道部を囲むように充填されていた。但し、掘方底面での充填土の厚さについては不明である。カマド袖の、住居壁面からの残存規模は、左袖が75cm、右袖が64cmである。燃焼部は、床面との高低差がなく、10cm程の段を経て煙道部に続く。煙道部底面は、緩やかな傾斜で10cm程上がって、煙出し部に至る。

燃焼部は、住居壁面の位置までの掘り込みであり、奥行き103cm、幅50cm、煙道部は長さ95cm、確認面からの深さ10cm、煙出し部は円形で径27×29cmを測る。燃焼部～煙道部底面には炭が分布していたが、被熱による赤色硬化は顕著ではなかった。

カマド以外の施設としては、カマド右袖の脇に貯蔵穴が検出された。平面形は南北に長い楕円形で、断面形は浅い皿状を呈する。規模は90×70cm、床面からの深さ15cmを測る。

図化し得た遺物は少なく、土師器甕のほか、貝巣穴痕泥岩３点を合わせ、計４点であった。

時期は、６世紀前半と考えられる。

第211号住居跡（第237・238図）

遺物の調査区南側西寄り、I－２グリッドに位置する。カマドのみの遺存である。第189・243号住居跡を切り、第187・188・203号住居跡、第14号溝跡に切られている。第258号住居跡との関係は不明である。

住居の平面形は不明である。カマド袖部は、左袖のみの遺存であり、住居壁面からの遺存規模は65cm、燃焼部は、長さ96cm、幅（53）cm、床面からの深さ５cm、煙道部は長さ134cm、幅32cm、確認面からの深さ21cmを測る。カマドの主軸方向は、N－33°－Wを指す。

燃焼部～煙道部の底面には、炭や灰が数cm程堆積しており、燃焼部の一部底面や、被熱による壁面の赤色硬化も顕著であった。燃焼部内の炭層直上から、土師器坏１点（１）が出土した。

カマド以外の施設としては、ピットが４基検出された。

P１・４は、床面精査の時点では検出されず、各々床面から10cmと15cm掘り下げた段階で確認された。

P１は円形で、規模は径48×47cm、床面からの深さ30cm、P２は楕円形で、径72×50cm、床面からの深さ32cm、P３は円形で、径35×32cm、床面からの深さ６cm、P４は円形で、径46×46cm、床面からの深さは23cmである。P２は、カマドとの位置関係から、貯蔵穴の可能性も考えられる。

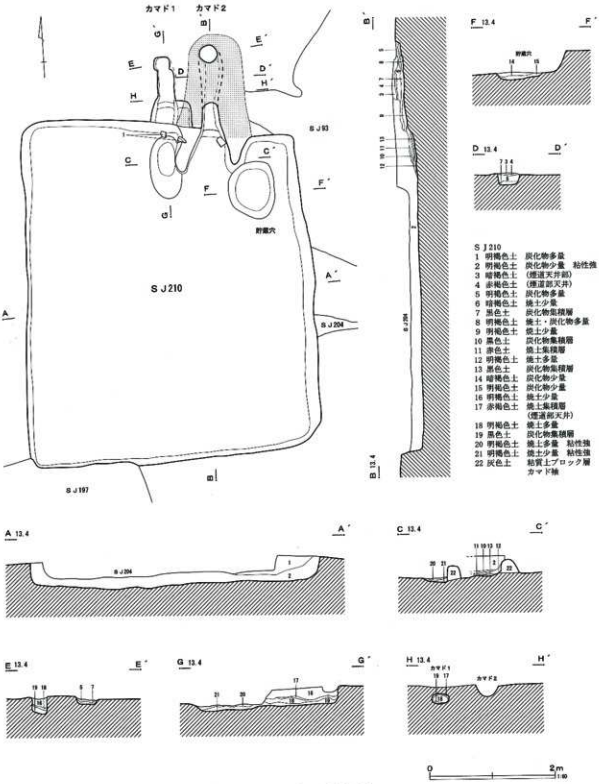
なおP２は、第187号住居跡の床面精査の時点では検出されず、本住居跡の精査時に確認されたため、本住居跡に伴うと判断した。

図化し得た遺物は、土師器坏１点であった。

遺物の時期は、６世紀第Ⅲ四半期と考えられる。

第212号住居跡（第239・240図）

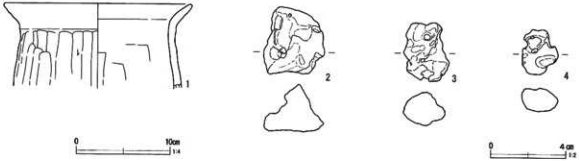
調査区西側南寄り、H・I－２グリッドに位置す



第235図　第210号住居跡

る。第165号住居跡、第25号土坑に切られていると思われる。平面形は不明で、確認面からの深さ0.30mである。

カマドのみの遺存である。このカマドは、東壁に設けられていると思われる。カマド掘方には、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された（アミ部分）。この粘質土は、幅9～12cm程の規模で、煙道部を囲むように充填されていた。



第236図　第210号住居跡出土遺物

第97表　第210号住居跡出土遺物観察表（第236図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	(19.6)	8.9	－	258.4	5	群馬	角	普通	にぶい黄橙		
2	須恵器装飾品		長3.5幅3.2厚2.4重14.7								橙	10孔、被熱	238－1
3	須恵器装飾品		長3.1幅2.2厚1.7重6.0								灰白	12孔、被熱弱	238－2
4	須恵器装飾品		長2.4幅1.9厚1.2重3.0								にぶい橙	10孔、被熱弱	238－2

但し、掘方底面での充填土の厚さについては不明である。

検出し得た範囲内で、煙道部は長さ132cm、幅53cm、確認面からの深さ８cmを測る。カマド方位はN－89°－Eを指す。煙道部底面は僅かに窪み、きわめて緩やかな傾斜で煙出し部へと続く。

図化し得た遺物は、須恵器甕の破片１点であった。

本住居跡は、第165（７世紀第Ⅳ四半期）・第196号住居跡（７世紀末～８世紀第Ⅰ四半期）に切られていると思われる。この点から、本住居跡の時期はそれ以前であると推測される。

第213号住居跡（第241図）

調査区西側南寄り、H－２グリッドに位置する。第165号住居跡を切り、第196号住居跡に切られている。

カマドのみの遺存である。このカマドは、住居北壁に設けられていると思われる。カマド掘方には、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された（アミ部分）。この粘質土は、幅10～15cm程の規模で、煙道部を囲むように充填されていた。但し、掘方底面での充填土の厚さは不明である。検出し得た範囲内で、煙道部は長さ88cm、幅55cm、確認面からの深さ18cmを測る。カマド方位はN－22°－Wを指す。煙道部底面は、緩やかな傾斜で煙出し部に続く。煙道部底面には厚さ数cmの炭層が検出された。

遺物は出土しなかった。

本住居跡を切る第196号住居跡の時期は、７世紀末～８世紀第Ⅰ四半期と考えられる。この点から、本住居跡の時期はそれ以前と推測される。

第214号住居跡（第242図）

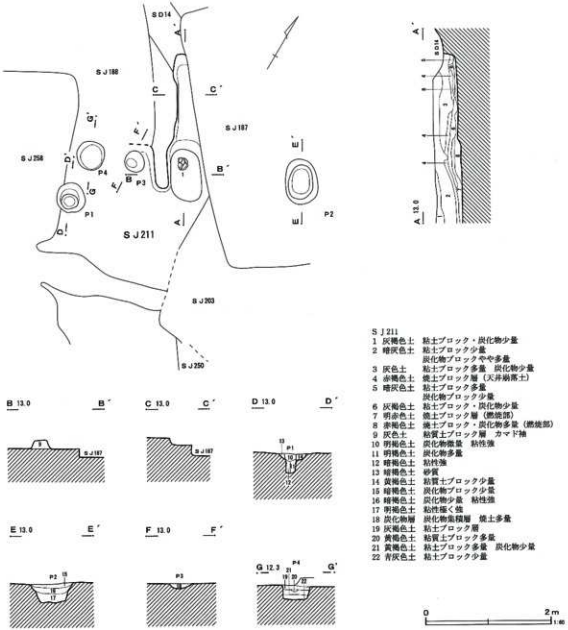
調査区中央部南西寄り、H－３グリッドに位置する。第118・125・169・186号住居跡、そして、第32号井戸跡、第10号溝跡に切られている。

平面形はやや歪んだ長方形で、規模は南北4.96m、東西3.72m、確認面からの深さ0.52mを測る。主軸方向はN－13°－W、またはN－77°－Eを指すと推定される。

カマドおよび、その他の施設は確認されていない。

遺物は出土しなかった。

本住居跡が切っていると考えられる第118・125・169・186号住居跡の内、時期的に最も新しいのは第125号住居跡（９世紀第Ⅰ四半期）である。従って、本住居跡の時期は、これ以降であると推測される。



SJ211
1 灰褐色土　粘土ブロック・炭化物少量
2 暗灰色土　粘土ブロック少量
炭化物ブロック中中多量
3 灰色土　粘土ブロック多量　炭化物少量
4 赤褐色土　焼土ブロック層（天井崩落土）
5 暗灰色土　粘土ブロック多量
炭化物ブロック少量
6 灰褐色土　粘土ブロック・炭化物少量
7 明赤色土　焼土ブロック層（燃焼部）
8 赤褐色土　焼土ブロック・炭化物多量（燃焼部）
9 灰色土　粘質土ブロック層　カマド袖
10 明褐色土　炭化物微量　粘性強
11 明褐色土　炭化物多量
12 暗褐色土　粘性強
13 暗褐色土　砂質
14 黄褐色土　粘質土ブロック少量
15 暗褐色土　炭化物ブロック少量
16 暗褐色土　炭化物少量　粘性強
17 明褐色土　粘性極く強
18 炭化物層　炭化物集積層　焼土多量
19 灰褐色土　粘土ブロック層
20 黄褐色土　粘質土ブロック多量
21 黄褐色土　粘土ブロック多量　炭化物少量
22 青灰色土　粘土ブロック少量

第237図　第211号住居跡

第98表　第211号住居跡出土遺物観察表（第238図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(14.7)	5.1	—	182.3	75	群東	雲	普通	橙	カマド燃焼部	171-5

第238図　第211号住居跡出土遺物

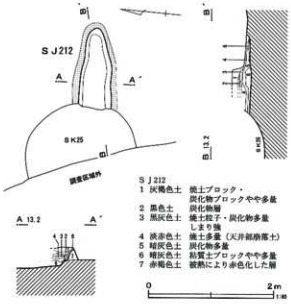
第215号住居跡（第243・244図）

調査区北東部、G－8グリッドに位置する。第117・129号住居跡、第19号土坑に切られている。第148号住居跡との関係は不明である。

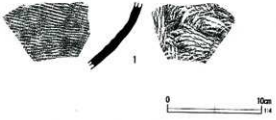
平面形は、方形または長方形のいずれであるかは

第99表　第212号住居跡出土遺物観察表（第240図）

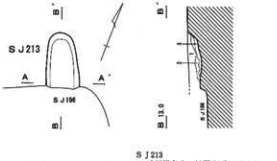
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	甕	－	7.0	－	63.9	5			普通	灰		



第239図　第212号住居跡



第240図　第212号住居跡出土遺物



第241図　第213号住居跡

不明である。規模は、東西4.42mであるが、南北規模については4.29mまで検出できたにとどまる。確認面からの深さは、0.36mを測る。主軸方向は、N－27°－W、またはN－23°－Eを指すと推定される。

カマドおよび、その他の施設は確認されなかった。

図化し得た遺物は、土師器の甕または甑1点と、桃と思われる種子1点の、計2点であった。

遺物の時期は、6世紀代と考えられる。

第217号住居跡（第245・246図）

調査区北東部、F－8・9グリッドに位置する。北東コーナーは、調査区外に続く。第145号住居跡を切り、第142号住居跡に切られている。

平面形はやや歪んだ方形を呈し、規模は東西3.36m、南北3.50m、確認面からの深さ0.30mを測る。主軸方向は、N－8°－W、またはN－82°－Eを指すと推定される。

カマドおよび、その他の施設は確認されていない。

図化し得た遺物は、土師器坏・甕、須恵器蓋・坏など、計10点であった。

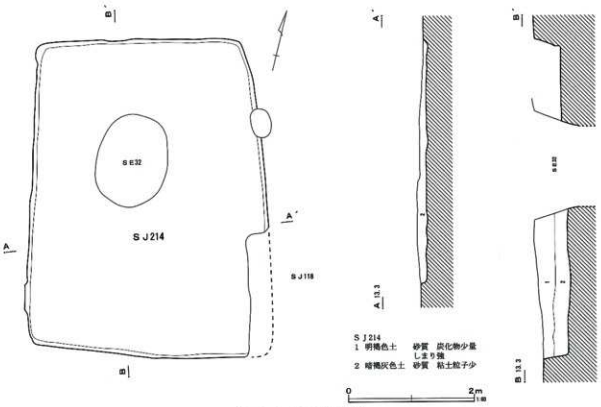
遺物の時期は、7世紀第Ⅰ四半期と考えられる。なお、6の須恵器坏は、混入と推測される。

第218号住居跡（第247図）

調査区南側、J－2・3グリッドに位置する。カマドと北壁の一部が検出されたのみで、それ以外の部分については、調査区外に続いている。第250号住居跡を切り、第180・194号住居跡に切られるが、第224号住居跡との新旧関係は不明である。

遺存部分が極めて小さく、平面形は不明である。検出し得た範囲内での規模は、東西4.68m、南北0.55m、確認面からの深さ0.10mを測る。

カマドは北壁に造られ、方位は、N－41°－Eを指す。遺存度は低いものの、右袖が確認されており、壁面からの残存規模は28cmである。燃焼部・煙道部



第242図　第214号住居跡

ともに、床面との高低差は認められない。ほぼ水平に煙出し部へと続き、この部分で深さ8cm程の皿状に窪む。煙道部は、長さ122cm、幅40cm、確認面からの深さ10cmを測る。

遺物は出土しなかった。

本住居跡を切っている第180号住居跡は、6世紀第Ⅱ四半期である。この点から、本住居跡の時期は、それ以前であると推測される。

第219号住居跡（第248・249図）

調査区南側、I・J－3グリッドに位置する。第180・202・239・250号住居跡を切り、第194・203号住居跡、第14号溝跡に切られる。

西壁が失われているため、平面形は不明である。規模は、南北4.63mであるが、東西は4.11mまでの検出で、確認面からの深さは0.12mを測る。主軸方向はN－41°－Eを指す。

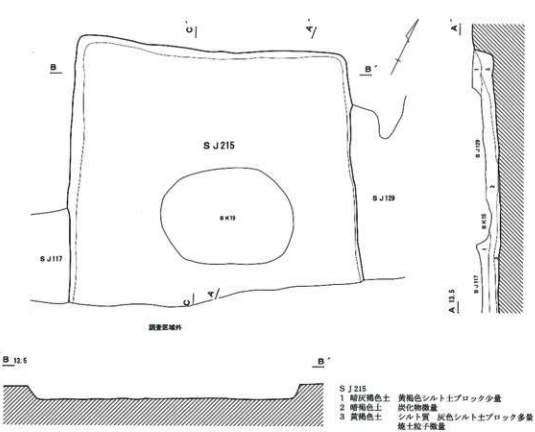
カマドは、北壁のやや東寄りに設けられている。カマド掘方には、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された（アミ部分）。この粘質土は、幅27～42cm程の規模で、煙道部を囲むように充填されていた。但し、掘方底面での充填土の厚さについては不明である。

袖部は両袖ともに確認され、住居壁面からの残存規模は、左袖65cm、右袖56cmを測る。燃焼部は奥行き103cm、幅35～40cm、床面からの深さ8cm、煙道部は長さ113cm、幅20～26cm、確認面からの深さ13cmである。燃焼部は、住居壁面より奥にまで掘りこまれるタイプで、底面は浅く皿状に窪み、10cm程の段を経て煙道部に至る。煙道部は、緩やかな傾斜で煙出し部へと至る。燃焼部壁面には、被熱による若干の赤色硬化が認められたが、全体的に焼け方は弱いといえる。

カマド左袖の脇にも、炭の分布が認められた。遺物は、主としてカマド左袖の脇から、西壁にかけての範囲内で検出された。

図化し得た遺物は、土師器坏・甕・甑などを含め、計6点であった。

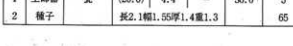
遺物の時期は、6世紀第Ⅲ四半期と考えられる。



第243図　第215号住居跡

第100表　第215号住居跡出土遺物観察表（第244図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	(20.6)	4.4	－	56.0	5	茨西	雲、角、針	不良	黒		
2	種子		長2.1幅1.55厚1.4重1.3				65				黒	桃の実、炭化による黒色化	236－5



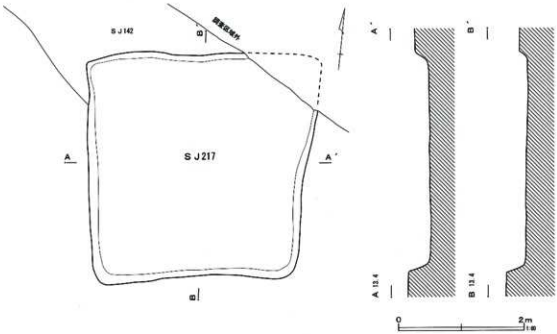
第244図　第215号住居跡出土遺物

第220号住居跡（第250～253図）

調査区南側、H・I－2・3グリッドに位置する。第243・257号住居跡を切り、第172・186・187・188号住居跡、第14号溝跡、第36号井戸跡に切られている。

平面形は北壁側が短い台形で、規模は東西5.95m（北壁）と7.03m（南壁）、南北5.70m（西壁）と5.95m（東壁）、確認面からの深さ0.50mを測る。貯蔵穴がカマド右袖側にあるためか、北壁はカマド右（東）側の方が、25cmほど奥まっている。主軸方向はN－12°－Wを指す。

カマドは、北壁のやや西寄りに設けられている。袖部は両袖ともに確認され、住居壁面からの残存規模は、左袖が50cm、右袖が80cmである。燃焼部と煙道部を含めた長さは1.70m、幅25～40cm、確認面か



第245図　第217号住居跡

らの深さ15cmである。燃焼部底面と床面には高低差がほとんどなく、きわめて緩やかな傾斜で、煙道部・煙出し部へと上がっている。燃焼部壁面・底面と、燃焼部付近の煙道部壁面・底面には、被熱による赤色硬化が認められるとともに、炭や灰が数cmの厚さで堆積していた。

また、右袖手前には炭や灰が多くみられ、希薄にはなるものの、貯蔵穴の縁まで分布していた。

カマド以外の施設としては、貯蔵穴1基と、ピット5基が確認された。貯蔵穴は平面長方形で、底面はやや丸味をもつ。規模は、東西120cm、南北80cm、床面からの深さ48cmを測る。

P1は円形で径28×25cm、床面からの深さ20cm、P2は円形で径29×25cm、床面からの深さ30cm、P3は円形で径62×56cm、床面からの深さ17cm、P4は円形で径41×45cm、床面からの深さ40cmである。P5は、床面から15cm程掘り下げた段階で検出された。楕円形で、径42×61cm、床面からの深さ9cmである。

比較的多くの遺物が出土しており、その内、15の小型の土師器甕は貯蔵穴際、16・17の土師器甕はカマド燃焼部～煙道部での出土である。この他、18の土師器甕と、19の土師器甑は、貯蔵穴手前ともいえる位置から出土している。

土師器坏・甕・甑、須恵器蓋・甕・瓶のほか、ミニチュア土器や土玉を含め、図化し得た遺物は計28点であった。

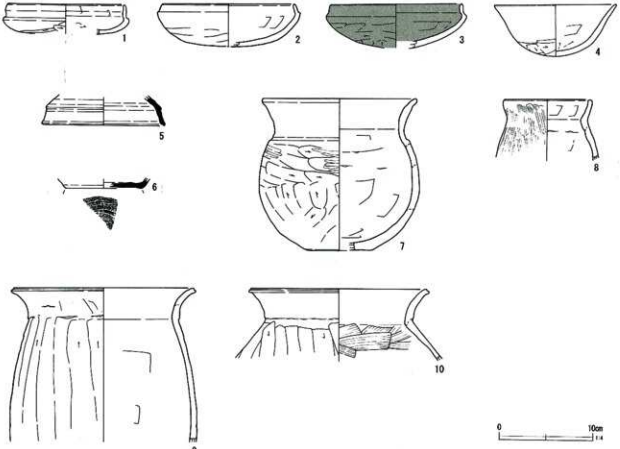
遺物の時期は、6世紀第Ⅲ四半期と考えられる。

第221号住居跡（第254・255図）

調査区南側、I－4グリッドに位置する。第229・234・235・241・259号住居跡を切り、第96・119号住居跡・第37号井戸跡に切られる。

平面形は、北壁の方がやや短い台形を呈する。規模は、東西5.15m（北壁）・5.82m（南壁側）、南北5.15m、確認面からの深さ0.30mを測る。主軸方向は、N－8°－Eを指す。周壁溝は、北壁中央を除いて全周している。幅12～25cm、床面からの深さ8～13cmである。

カマドは、検出されなかった。北壁中央の、周溝



第246図　第217号住居跡出土遺物

第101表　第217号住居跡出土遺物観察表（第246図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(11.8)	3.2	－	34.3	15	太田	雲	普通	灰黄褐		
2	土師器	坏	(14.0)	4.5	－	54.1	20	栃南	角、針	普通	にぶい橙		
3	土師器	坏	(13.8)	4.7	－	53.6	20	栃南		普通	橙		
4	土師器	坏	(13.0)	5.4	－	123.4	40	新治		普通	にぶい橙		
5	須恵器	壺	－	3.2	(13.0)	21.1	10			普通	灰		
6	須恵器	坏	－	1.1	(8.0)	9.4	10	栃木か		普通	灰白		
7	土師器	甕	(16.4)	16.0	(6.7)	451.6	30	茨西		普通	橙		189−6
8	土師器	甕	(9.0)	6.4	－	40.7	10	栃北		普通	橙		
9	土師器	甕	(19.0)	16.3	－	325.4	15	埼北	針	普通	にぶい黄橙		
10	土師器	甕	(18.8)	7.4	－	342.7	20	群東		良好	浅黄橙		

が途切れる位置に、カマドが存在していたものが失われたのであろうか。

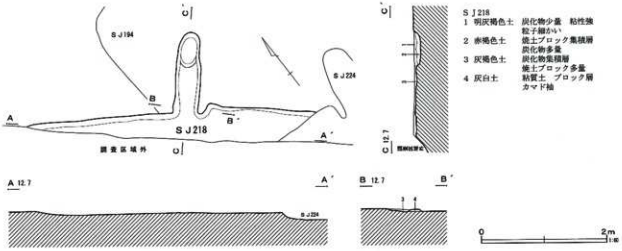
カマド以外の施設としては、周壁溝の他に、ピットが3基検出された。

P1は楕円形で径65×55cm、床面からの深さ40cm、P2は円形で径62×57cm、床面からの深さ42cm、P3は円形で径75×73cm、床面からの深さ16cmである。P1～3は、位置関係からみて柱穴と考えられるが、北東部分には検出されなかった。

住居跡中央からP2の周辺にかけて、炭の分布が認められた。周壁溝は、北壁中央で途切れるほかは全周していた。

土師器坏・甕・壺、須恵器坏・甕のほか、管玉、およびその他を含め、図化し得た遺物は計18点であった。

遺物の時期は、7世紀第Ⅱ～Ⅲ四半期と考えられ



第247図　第218号住居跡

る。なお、7は6世紀代の土師器坏であり、8は9世紀代の須恵器坏であることから混入であると推定される。

第222号住居跡（第256図）

調査区北東部、F－8グリッドに位置する。第143号住居跡、第31号井戸跡に切られているが、第263号住居跡との新旧関係は不明である。

平面形は正方形で、規模は東西4.17m、南北4.70m、確認面からの深さ0.30mを測る。主軸方向は、N－13°－Eと推定される。

カマドは検出されていないが、位置や土層断面から、P2はカマド燃焼部と推測される。P2の残存規模は、東西26cm×南北45cm、床面からの深さは25cmを測る。P2がカマド燃焼部である場合、その掘り込みは、住居壁面より奥にまで及んでいることになる。煙道部の痕跡は、認められなかった。

P1には、貯蔵穴の可能性が考えられるが、明確な根拠はない。P1は、平面楕円形で、規模は東西54cm、南北75cm、床面からの深さ10cmを測る。P1は、カマド西側の北壁よりも奥にまで及んでいる。第220号住居跡の北壁の東半部にみられるように、カマド西側の壁面よりも奥に構築されているとも考えられる。

遺物は出土しなかった。

本住居跡は、第143号住居跡（6世紀第Ⅳ四半期）に切られていることから、本住居跡は時期的に、それ以前であると推測される。

第223号住居跡（第257・258図）

調査区南側、J－4グリッドに位置する。第225号住居跡を切り、第181・183・239・259号住居跡・第14号溝跡に切られている。プランの大部分が失われており、しかも歪んでいるため、平面形と主軸方向は不明である。規模は、東西5.50m、南北は検出し得た範囲内で5.04m、確認面からの深さ0.31mである。

カマドは検出されなかった。カマド以外の施設として、ピットが1基確認された（P1）。

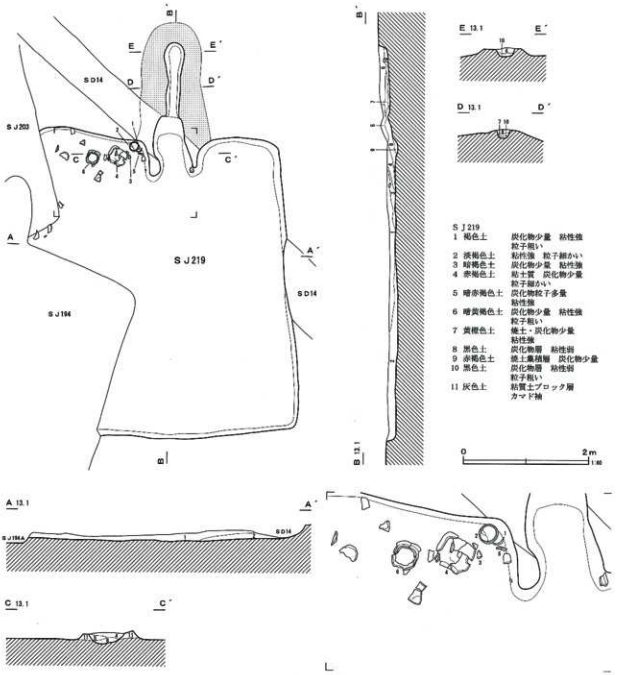
P1は、床面精査の時点では検出されず、床面から5cm程掘り下げた段階で確認されたものである。平面形は楕円形で、径50×65cm、床面からの深さ21cmである。

図化し得た遺物は、土師器坏・甕（または甑）の、4点であった。

遺物の時期は、5世紀第Ⅳ四半期と考えられる。なお、2は6世紀末の土師器坏であるため、混入と推測される。

第224号住居跡（第259図）

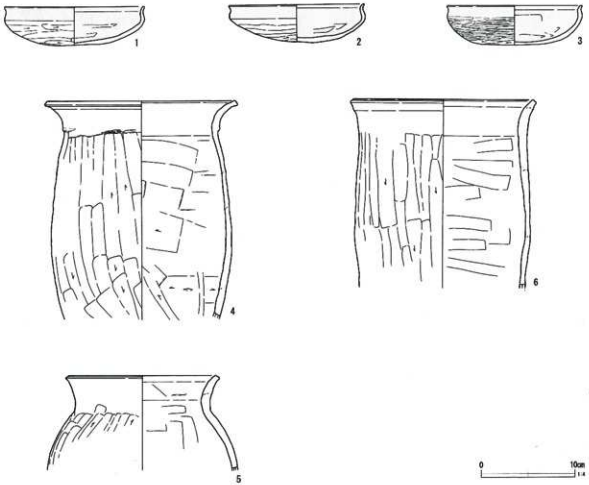
調査区南側、J－3グリッドに位置する。南側部分が調査区外に続くため、平面形は不明である。第236号住居跡を切り、第180・194・202号住居跡に切



第248図　第219号住居跡

第102表　第219号住居跡出土遺物観察表（第249図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(14.6)	4.1	－	130.0	60	埼南	針	良好	にぶい褐		171-6
2	土師器	坏	(14.4)	4.1	－	197.9	95	埼南	角、針	良好	にぶい橙		171-7
3	土師器	坏	(14.4)	4.3	－	98.2	40	埼南	針	良好	明赤褐		171-8
4	土師器	甕	(20.0)	22.9	－	815.9	20	群東	雲、針	普通	橙		
5	土師器	甕	(15.4)	10.0	－	165.7	5	埼南	雲、角、針	普通	にぶい黄橙		
6	土師器	甑か	(18.8)	19.9	－	997.5	30	鉢南		普通	浅黄		190-1



第249図　第219号住居跡出土遺物

られている。

検出し得た範囲内での規模は、東西3.45m、南北2.23mであり、確認面からの深さは0.1mを測る。主軸方向は、N－2°－Eを指す。

カマドは、北壁に設けられている。袖部は両袖ともに確認されており、住居壁面からの残存規模は、左袖が40cm、右袖が31cmである。燃焼部は、住居壁面よりも奥にまで及んでいる。燃焼部と煙道部を含めた長さは126cmであり、燃焼部は幅56cm、床面からの深さ15cmを測る。燃焼部・煙道部とも、顕著な赤色硬化は認められなかった。

カマド以外の施設として、住居跡内から4基のピットが検出されているが、帰属については明言できない。なお、P3・4は、床面精査の時点では検出されず、床面から16cm掘り下げた段階で確認されたものである。

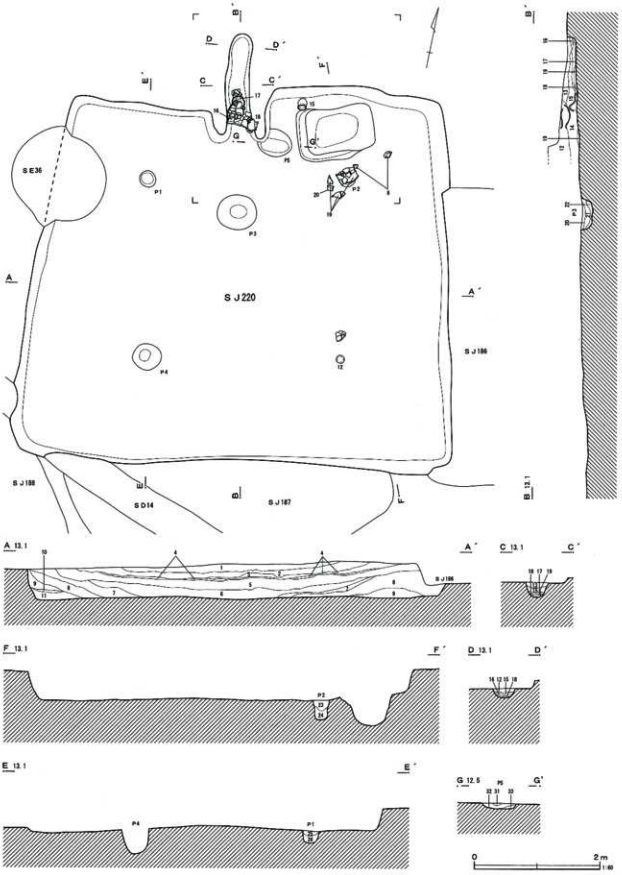
P1は円形で径54×48cm、床面からの深さ15cm、P2は円形で径26×24cm、床面からの深さ10cm、P3は楕円形で径50×42cm、床面からの深さ33cm、P4は円形で径35×34cm、床面からの深さ35cmを測る。

遺物は出土しなかった。

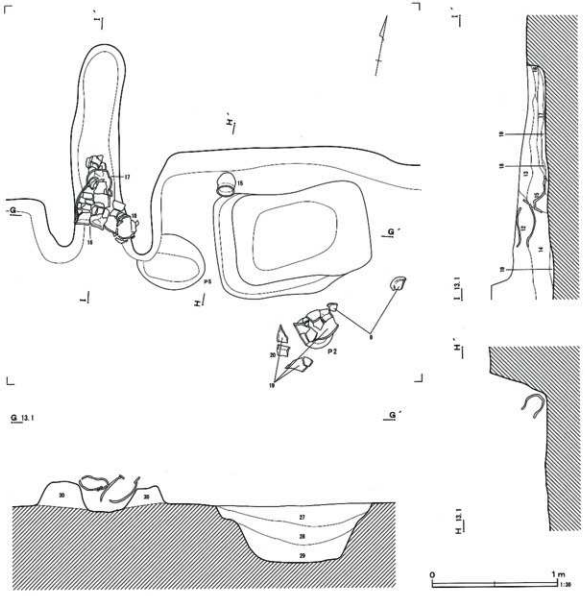
本住居跡は、第180号住居跡（6世紀第Ⅱ四半期）と、第202号住居跡（6世紀第Ⅰ四半期）に切られている。この点から、本住居跡の時期はそれ以前であると推測される。

第225号住居跡（第260・261図）

調査区南側、I・J－4グリッドに位置する。第234号住居跡を切り、第181・223・259号住居跡、第14号溝跡およびピットに切られている。遺構のプランの大部分を失っていること、平面形が歪んでいるこ



第250図　第220号住居跡（1）



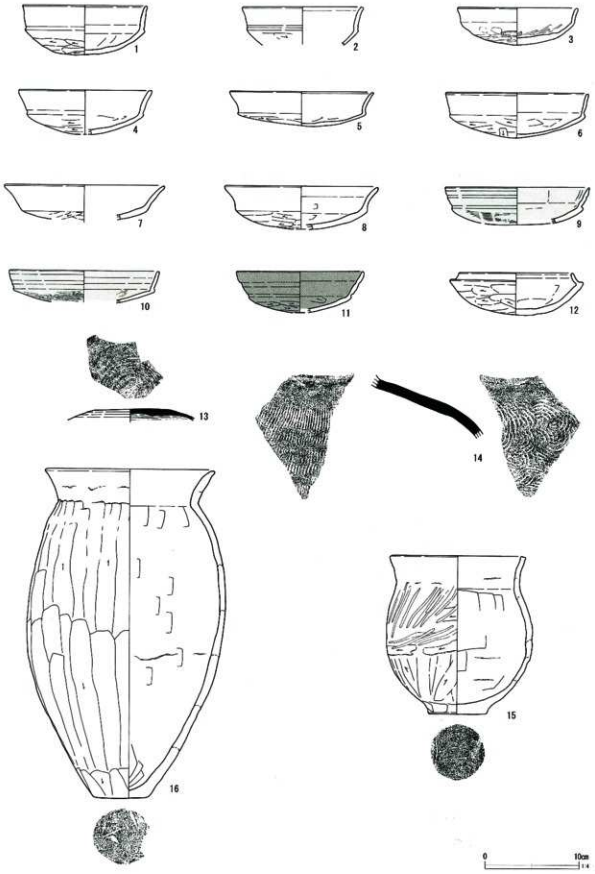
S J 220
1 黄褐色土　粘性強　粒子粗い
2 淡灰色土　黄褐色粘質土少量　粘性強　粒子細かい
3 黒褐色土　炭化物層
4 白色土　粘土粒子細かい　粘性強
5 黄褐色土　粘性強　粒子粗い
6 黄黒色土　炭化物層　黄色粘質土ブロック少量　粘性弱
7 淡褐色土　粘土層ただし白色がかっている　粘性弱
8 黄褐色土　砂質土層
9 暗黄色土　砂質土層　粘性強
10 淡黄褐色土　砂層
11 黄褐色土　粘性の弱い炭化物を含まない層
12 暗灰褐色土　焼土粒子・炭化物微量
13 淡赤褐色土　焼土・炭化物やや多量
14 褐灰色土　焼土粒子・炭化物やや多量
15 暗灰褐色土　焼土粒子・炭化物やや多量
16 赤褐色土　焼土層（天井崩落土）煙道部
17 黒色土　炭化物層（天井崩落土）煙道部
18 赤褐色土　焼土層（天井崩落土）煙道部
19 黒色土　炭化物層（天井崩落土）煙道部
20 赤褐色土　焼土・炭化物やや多量
21 赤褐色土　焼土ブロック・炭化物ブロックやや多量
22 赤褐色土　焼土ブロック層　炭化物やや多量
23 青灰色土　砂質
34 青灰色土　粘土質
25 褐灰色土　砂質　粘質土ブロックやや多量　炭化物少量
26 灰褐色土　粘土質　粘質土ブロック多量　炭化物少量
27 暗褐色土　焼土粒子・炭化物少量
28 暗褐色土　焼土粒子やや多量　炭化物ブロック多量
29 暗褐灰色土　炭化物ブロック少量
30 灰色土　粘質土ブロック層　カマド袖
31 赤褐色土　焼土層
32 黒色土　炭化物集積層
33 赤褐色土　焼土層

第251図　第220号住居跡（2）

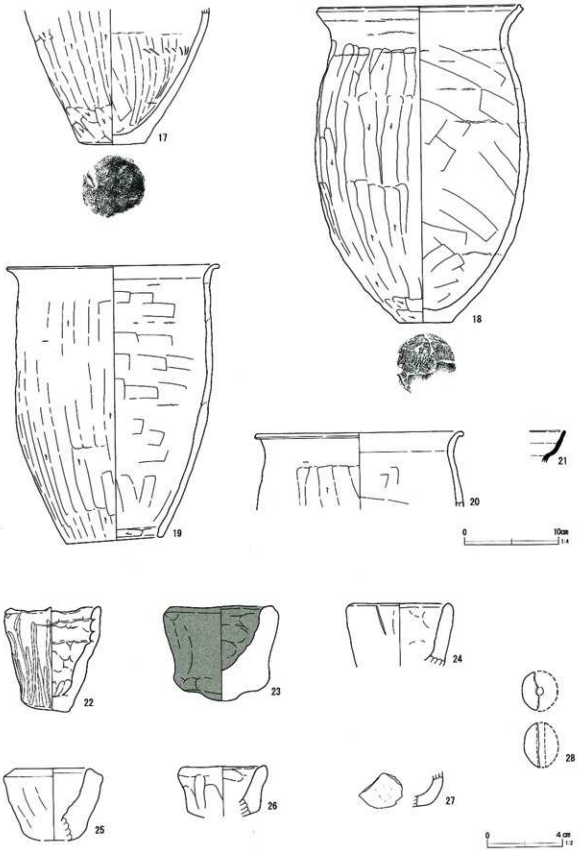
となどから、平面形・主軸方向は不明である。規模は東西が4.85m、南北については3.17mまでの確認である。確認面からの深さは0.34mを測る。

カマドおよび、その他の施設は確認されなかった。西北コーナー付近を除き、全体的に炭化物が分布していた。図化し得た遺物は、土師器坏・坩・高坏・甕など、計8点であった。

遺物の時期は、5世紀第Ⅳ四半期と考えられる。



第252図　第220号住居跡出土遺物（1）



第253図　第220号住居跡出土遺物（2）

第103表　第220号住居跡出土遺物観察表（第252・253図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	13.0	5.2	－	129.6	50	群東	雲	普通	橙	貯蔵穴	
2	土師器	坏	(12.4)	4.0	－	45.1	20	埼北		普通	橙		
3	土師器	坏	(13.8)	3.9	－	83.4	40	埼北		普通	橙		
4	土師器	坏	(14.0)	4.6	－	61.0	20	埼北		普通	橙	掘り方	
5	土師器	坏	15.3	3.3	－	129.2	70	群東	雲、角、針	普通	橙		171－9
6	土師器	坏	(15.2)	3.8	－	77.2	20	群東	針	普通	橙		
7	土師器	坏	(16.6)	3.7	－	36.9	5	埼北	雲、角	普通	にぶい黄橙		
8	土師器	坏	16.0	4.5	－	240.2	70	埼北	雲、角	普通	橙		171－10
9	土師器	坏	(15.4)	3.8	－	34.2	20	群東	雲、針	普通	赤褐	掘り方	
10	土師器	坏	(15.8)	3.4	－	97.3	30	群東	針	普通	明赤褐		
11	土師器	坏	(15.4)	4.4	－	56.9	25	埼北	雲	良好	黒		
12	土師器	坏	12.0	4.7	－	240.9	95	栃南	雲、角、針	普通	にぶい黄		172－1
13	須恵器	蓋	－	1.3	－	43.9	15		針	良好	灰		
14	須恵器	甕	－	6.6	－	135.1	5			普通	灰		
15	土師器	小型甕	13.6	16.6	6.2	887.0	95	茨西	雲、針	良好	にぶい黄橙		190－2
16	土師器	甕	17.6	34.9	5.8	2202.5	90	茨西	角	普通	橙	カマド燃焼部　木樂痕	214－2
17	土師器	甕	－	14.3	7.0	866.7	70	茨西	雲、角	普通	橙	カマド燃焼部	
18	土師器	甕	(21.2)	33.5	5.6	2494.3	80	栃南		普通	にぶい黄橙	カマド右袖構築材　被熱	214－3
19	土師器	甑	22.0	28.9	10.2	1863.4	75	群東	雲	普通	橙		214－4
20	土師器	甑	(21.6)	8.0	－	74.3	5	栃南	雲、角	普通	灰黄褐		
21	須恵器	壺	－	3.3	－	24.7	5			良好	灰	内面窯壁付着	
22	土製品	ミニチュア	5.1	5.5	2.7	71.5	95		角	普通	橙		172－2
23	土製品	ミニチュア	(5.4)	5.0	－	61.0	40		雲	普通	黒		
24	土製品	ミニチュア	(5.0)	3.3	－	14.4	20		角、針	普通	にぶい黄橙		
25	土製品	ミニチュア	(3.8)	3.8	1.9	19.2	35		雲	普通	黒		
26	土製品	ミニチュア	(4.3)	2.7	－	9.2	45		針	普通	にぶい黄橙		
27	土製品	ミニチュア	－	－	－	3.8	35		角	普通	にぶい黄橙		
28	土製品	土玉	径(1.8)孔径(0.4)厚2.2重3.6残40							普通	にぶい黄橙		233－1

なお、3・4は6世紀代の遺物であり、混入と推測される。

第226号住居跡（第262図）

調査区西側、H－2グリッドに位置する。第165・208・209号住居跡に切られている。第232号住居跡との関係は不明である。

平面形は台形で、規模は東西3.25m、南北3.98m（北壁）・2.89m（南壁）、確認面からの深さ0.08mを測る。主軸方向はS－88°－W°を指す。

カマドは、東壁に2つ検出された。両者は重複しており、切り合い関係からカマド1が先行し、これを切ってカマド2が構築されたと判断した。

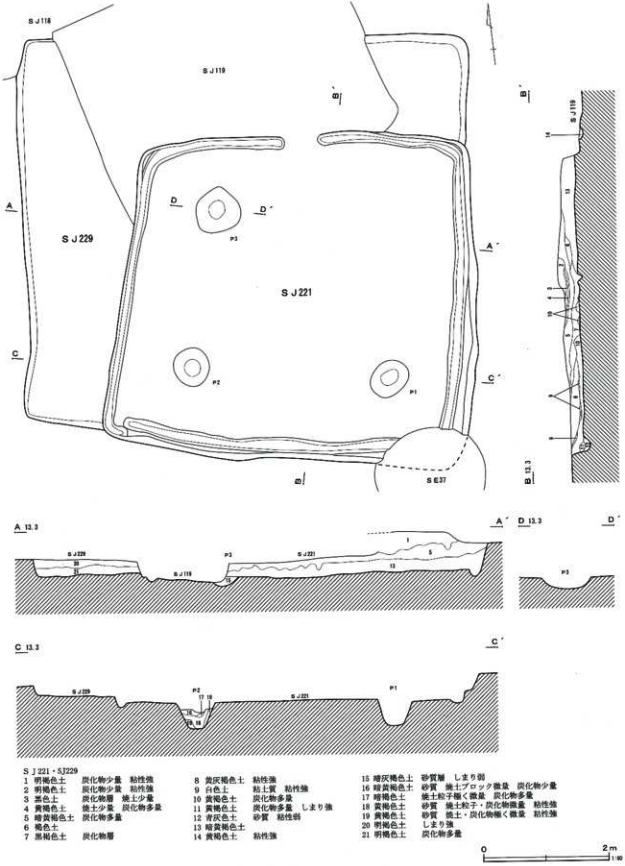
カマド1の規模は、長さは112cm、確認面からの深さは5cmを測り、方位はS－88°－Wを指す。燃焼部～煙道部の底面全体に焼土や炭が広がっていた。

カマド2の、燃焼部と煙道部を含めた長さは212cm、幅45cm、確認面からの深さ5cmを測り、方位はN－76°－Wを指す。カマド1程ではないものの、燃焼部～煙道部の底面には、焼土や炭が広がっていた。

カマド以外の施設としては、北西コーナーにピットが1基検出された。P1は円形で径40×38cm、床面からの深さ18cmである。

遺物は出土しなかった。

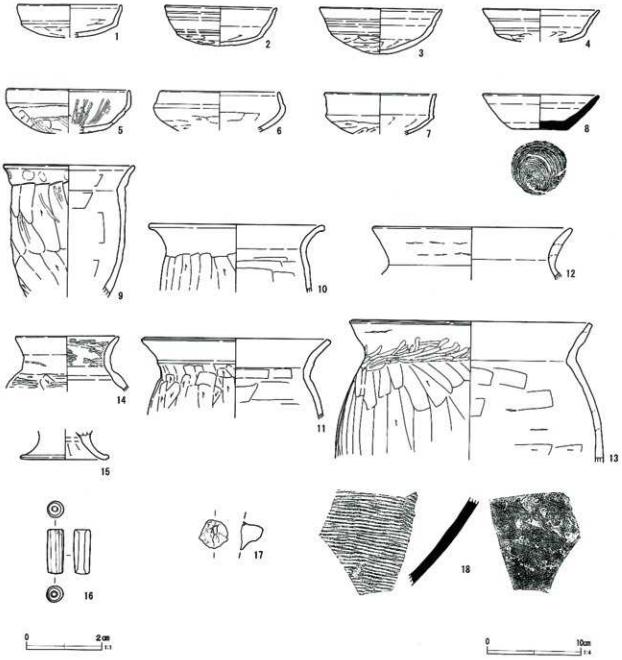
本住居跡を切る第165号住居跡と、第208号住居跡の時期は、それぞれ7世紀第Ⅳ四半期と6世紀第Ⅲ四半期である。この点から、本住居跡の時期はそれ以前と推測される。



S J 221・SJ229
1 明褐色土　炭化物少量　粘性強
2 明褐色土　炭化物少量　粘性強
3 茶色土　炭化物層　焼土少量
4 黄褐色土　焼土少量　炭化物多量
5 暗黄褐色土　炭化物多量
6 褐色土
7 黒褐色土　炭化物層
8 黄灰褐色土　粘性強
9 白色土　粘土質　粘性強
10 黄褐色土　炭化物多量
11 黄褐色土　炭化物多量　しまり強
12 青灰色土　砂質　粘性弱
13 暗黄褐色土
14 黄褐色土　粘性強
15 暗灰褐色土　砂質層　しまり弱
16 暗黄褐色土　砂質　焼土ブロック微量　炭化物少量
17 暗褐色土　焼土粒子極く微量　炭化物多量
18 黄褐色土　砂質　焼土粒子・炭化物微量　粘性強
19 黄褐色土　砂質　焼土・炭化物極く微量　粘性強
20 明褐色土　しまり強
21 明褐色土　炭化物多量

0　2m
1:80

第254図　第221・229号住居跡



第255図　第221号住居跡出土遺物

第227号住居跡（第213・214図）

調査区中央部、G－5・6グリッドに位置する。第198号住居跡に切られている。遺構の大分部が失われているため、平面形は方形・長方形のいずれであるかは不明である。規模は南北軸3.75mであるが、東西については1.60mまでの確認である。確認面からの深さは0.18mを測り、主軸方向はN－3°－Wを指す。

カマドは、北壁に設けられている。掘方に、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された（アミ部分）。カマド掘方には、煙道部を囲むように、幅12cm程の規模で粘質土が充填されていた。但し、カマド掘方底面での充填土の厚さについては不明である。袖部・燃焼部は、第198号住居跡に切られているため失われていた。煙道部の規模は、長さ97cm、幅25cm、確認面からの深さ13cmを測

第104表　第221号住居跡出土遺物観察表（第255図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(11.0)	3.5	－	58.2	40	埼北	針	普通	明赤褐		
2	土師器	坏	(12.0)	4.2	－	80.4	45	埼北	角	普通	橙		
3	土師器	坏	(12.7)	4.8	－	93.4	35	埼北	雲、角、針	不良	灰黄褐		
4	土師器	坏	(12.4)	3.4	－	26.6	25	埼北	雲、針	良好	褐灰	内外面黒色処理か	
5	土師器	坏	13.0	4.6	－	76.0	45	栃南	角	良好	明赤褐	輪積痕	
6	土師器	坏	(12.6)	4.2	－	45.0	20	栃南	雲	普通	灰白	漆付着か	
7	土師器	坏	(11.5)	4.3	－	100.9	70	群東	雲	普通	橙		
8	須恵器	坏	12.2	3.6	5.7	159.1	65	太田か		不良	灰白	漆付着か	172－3
9	土師器	甑か	(13.6)	14.8	－	354.0	35	茨西	雲	普通	にぶい黄橙		190－3
10	土師器	甕	(18.5)	7.1	－	140.5	10	埼北	雲、角、針	良好	橙		
11	土師器	甕	(19.4)	8.4	－	204.0	10	群東	雲	普通	にぶい黄橙		
12	土師器	甕	(21.0)	5.4	－	117.2	5	佐野	雲	普通	にぶい黄橙		
13	土師器	甕	(25.4)	14.7	－	509.1	20	茨西	雲、角、針	普通	にぶい黄橙		
14	土師器	壺	(10.8)	5.9	－	82.1	10	栃南	雲	普通	浅黄		
15	土師器	台付甕	－	3.2	9.0	89.7	10	群東	雲、角	普通	橙		
16	石製品	管玉	径0.78×0.84孔径0.24長2.27重2.66										234－2
17	土製品	甑か	長3.0幅3.0厚2.9重12.1				－			普通	にぶい橙	把手部分	
18	須恵器	甕	－	9.2	－	165.7	5		針	良好	灰		

る。煙道部の、被熱による赤色硬化は少なかった。

遺物は出土しなかった。

本住居跡を切る第198号住居跡の時期は、6世紀第Ⅲ四半期と推測される。この点から、本住居跡の時期は、それ以前であると推測される。

第228号住居跡（第263図）

調査区西側、H－1・2グリッドに位置する。遺構の大部分が、調査区外に続いているため、平面形は不明である。第165号住居跡、第25号土坑に切られている。

確認できた範囲内で、規模は東西1.05m、南北3.78m、確認面からの深さ0.30mを測る。主軸方向は、N－27°－E、またはN－63°－Wを指すと推定される。

カマドおよびその他の施設は、確認されなかった。

遺物は出土しなかった。

本住居跡を切る第165号住居跡の時期は、7世紀第Ⅳ四半期である。この点から、本住居跡の時期は、それ以前であると推測される。

第229号住居跡（第254・264図）

調査区南側中央寄り、I－4グリッドに位置する。プランの半分以上を失っている。第96・118・119・221・235号住居跡、第37号井戸跡に切られている。

平面形は長方形で、規模は東西7.15m、南北6.00m、確認面からの深さ0.27mを測る。主軸方向は、N－8°－E、またはN－81°－Wを指すと推定される。

カマドおよびその他の施設は、確認されなかった。

図化し得た遺物は、土師器の壺と思われる破片1点のみであった。

遺物の時期は6世紀代と考えられる。

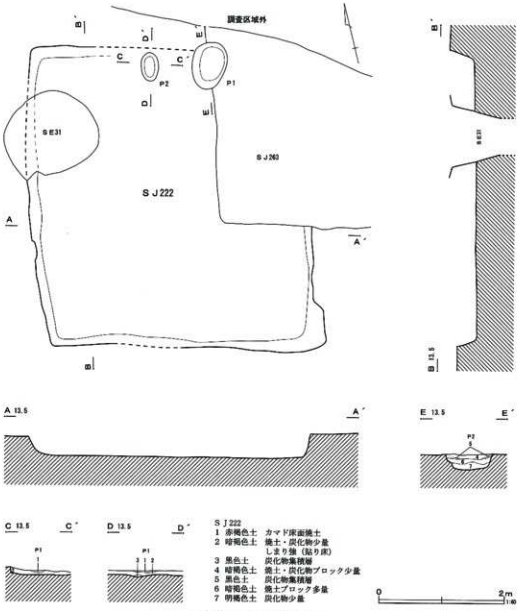
第230号住居跡（第265図）

調査区南側の東寄り、I－5グリッドに位置する。第133・134・138号住居跡に切られていること、プランが歪んでいることにより、平面形と主軸方向は不明である。規模は南北5.45mであるが、東西については2.61mまでである。確認面からの深さは、0.34mを測る。

カマドおよび、その他の施設は確認されなかった。

遺物は出土しなかった。

本住居跡居を切る第133・138号住居跡の時期は、それぞれ5世紀第Ⅳ四半期と、6世紀第Ⅱ四半期である。この点から、本住居跡の時期は、それ以前であると推測される。



第256図　第222号住居跡

第231号住居跡（第266・267図）

調査区南側、J－4・5グリッドに位置する。調査時点において、覆土内での切り合い関係を捉え切ることができず、遺構図では、第181号住居跡に切られているかのような表現になってしまったが、出土遺物から、本住居跡が切っていると推測される。そして、第259号住居跡を切っている。

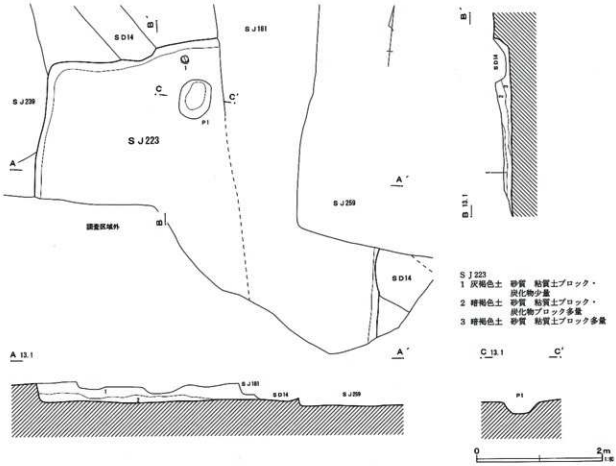
遺構の南部分が調査区外に続いていること、その他の部分についてもプランの多くが失われていることなどから、平面形と主軸方向は不明である。確認できた範囲内で、規模は東西3.46m、南北2.17m、確認面からの深さ0.32mを測る。

カマドは確認されなかった。

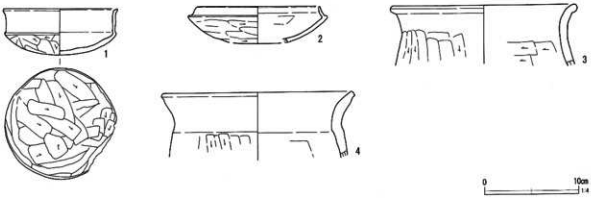
カマド以外の施設としては、ピットが2基検出された。位置的には、第181号住居内に相当するが、第231号住居跡の床面の検出中に確認されたことから、本住居跡に帰属すると判断した。

P1は円形で径43×36cm、床面からの深さ25cm、P2は楕円形で径72×42cm、床面からの深さ50cmを測る。

図化し得た遺物は、土師器短頸壺・甕など、計3点であった。



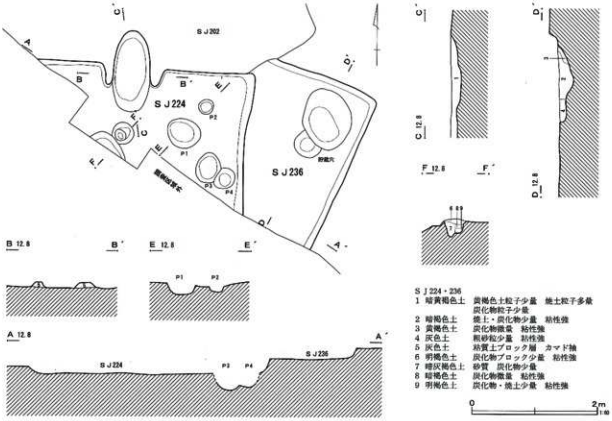
第257図 第223号住居跡



第258図 第223号住居跡出土遺物

第105表 第223号住居跡出土遺物観察表（第258図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	12.2	4.8	－	135.1	70	群東	角	良好	橙		172-4
2	土師器	坏	(13.0)	3.8	－	40.2	15	栃南	角、針	良好	灰黄褐		
3	土師器	甕	(19.2)	6.4	－	96.3	5	栃南		普通	橙	内外面に大黒斑	
4	土師器	甕	(21.2)	7.0	－	104.8	5	栃南	雲、針	普通	浅黄		



第259図　第224・236号住居跡

遺物の時期は、7世紀第Ⅰ四半期と考えられる。

第232号住居跡（第268・269図）

調査区西側、H－2グリッドに位置する。第242・257号住居跡を切り、第165・169・172・208・209号住居跡に切られている。第226号住居跡との関係は不明である。

平面形は隅丸の長方形で、規模は東西5.28m、南北4.43m、確認面からの深さ0.11mを測る。長軸方向は、N－19°－Eを指す。

カマドは確認されなかった。

カマド以外の施設として、周壁溝とピット2基が検出された。周壁溝は、東壁の一部に巡ってのみであり、規模は長さ275cm、幅7～10cm、床面からの深さ5～9cmを測る。

P1は楕円形で径55×40cm、床面からの深さ26cm、P2は楕円形で径45×35cm、床面からの深さ50cmである。

図化し得た遺物は、土師器甑の1点のみであった。

遺物の遺物の時期は、6世紀代と考えられる。

第233号住居跡（第270・271図）

調査区西側、F・G－2・3グリッドに位置する。第179号住居跡を切り、第163号住居跡、第32号土坑に切られている。

平面形はやや歪んだ隅丸方形で、規模は東西5.65m、南北5.58m、確認面からの深さ0.20mを測る。主軸方向はN－37°－W、またはN－53°－Eを指すと推定される。

カマドは確認されなかった。

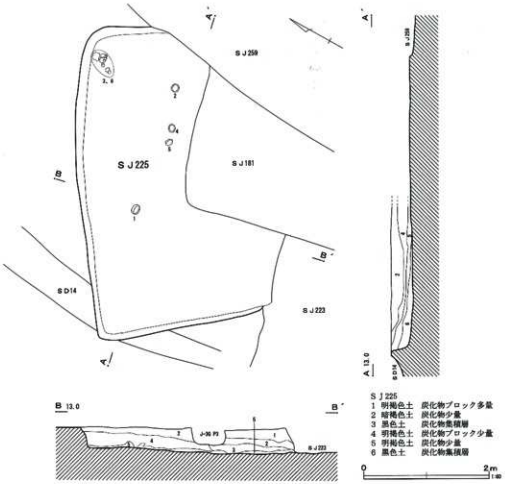
カマド以外の施設として、ピット3基が確認された。これらはいずれも、床面精査の時点では確認されず、床面から3～9cm掘り下げた段階で検出されたものである。

P1は円形で径34×36cm、床面からの深さ27cm、P2は円形で径38cm、床面からの深さ28cm、P3は円形で径35cm、床面からの深さ16cmである。

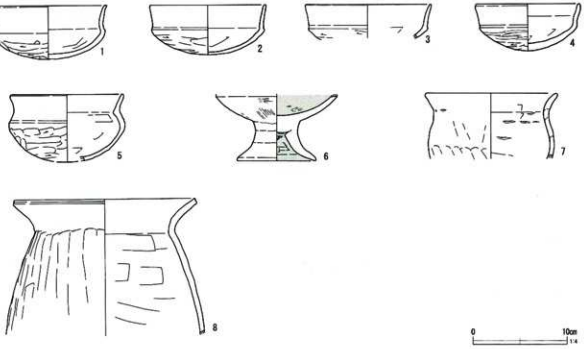
図化し得た遺物は、土師器坏1点のみであった。

遺物の時期は、5世紀第Ⅲ四半期と考えられる。

第234号住居跡（第272・273・274図）



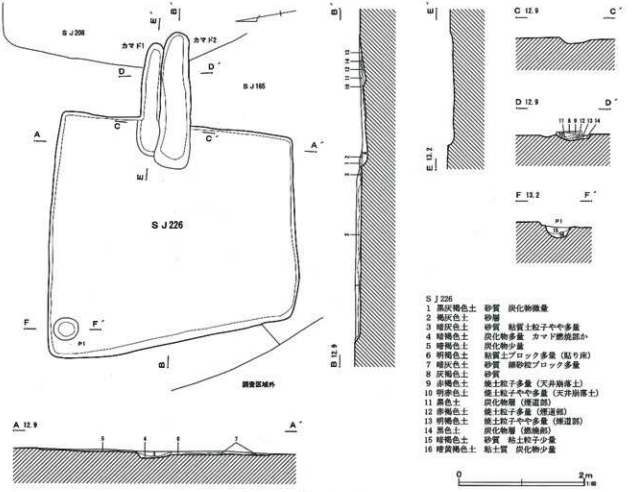
第260図　第225号住居跡



第261図　第225号住居跡出土遺物

第106表　第225号住居跡出土遺物観察表（第261図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	12.4	5.6	－	181.3	95	群東	雲	普通	橙		172-5
2	土師器	坏	12.3	5.3	－	173.3	95	群東		普通	にぶい橙	外面赤彩か	172-6
3	土師器	坏	(13.4)	3.7	－	33.1	15	群東		普通	橙		
4	土師器	坏	(11.2)	5.0	－	195.2	95	栃南	雲	良好	橙		172-7
5	土師器	坏	(11.4)	7.0	－	103.2	35	群東	雲、針	普通	橙		190-4
6	土師器	高坏	－	7.0	(8.3)	193.8	25	茨西	雲	普通	橙		
7	土師器	甕	(13.6)	6.9	－	71.3	15	茨西	雲	普通	灰黄褐	外面煤付着　被熱	
8	土師器	甕	(19.0)	14.5	－	403.2	20	茨西		普通	浅黄		

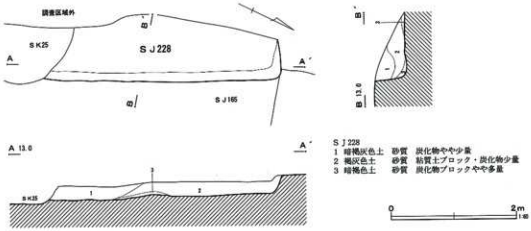


第262図　第226号住居跡

調査区南側、I・J－3・4グリッドに位置する。第241・246号住居跡を切り、第96・181・221・225号住居跡、第14号溝跡に切られている。

平面形は正方形で、規模は東西5.37m、南北5.15m、確認面からの深さ0.50mを測る。主軸方向はN－15°－Wを指す。

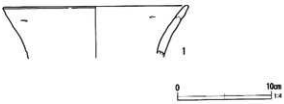
カマドは北壁のやや東寄りに設けられ、方位はN－25°－Wを指す。袖部は遺存していなかった。煙道部壁面には、顕著ではないものの、被熱による赤色硬化が認められた。燃焼部と煙道部を含めた長さは155cm、確認面からの深さは10cmである。焚口～燃焼部に該当する部分と推測される地点では、被熱による赤色硬化が顕著で、さらに焼土や炭が分布していた。また、カマド右袖に該当する部分の周囲にも、焼土や炭が確認された。煙道部の長さは住居壁面から1.44mで、確認面からの深さは0.33mを測る。



第263図　第228号住居跡

第107表　第229号住居跡出土遺物観察表（第264図）

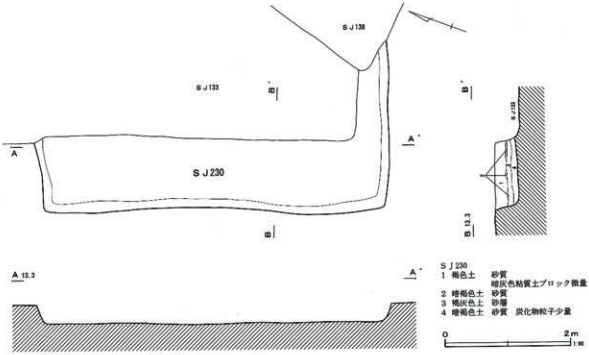
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	壺か	(19.5)	5.5	—	130.4	5	茨西	雲、角	普通	にぶい黄橙		



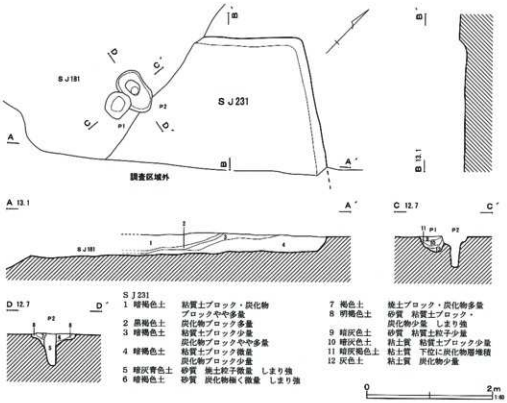
第264図　第229号住居跡出土遺物

燃焼部・煙道部の底面は、ともに床面との比高差はほとんどなく、煙出し部に至って比高差25cm程の段をもつ。

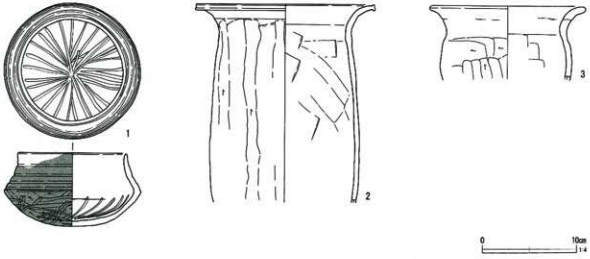
カマド以外の施設としては、周壁溝とピットが検出された。周壁溝は北東コーナー部分に巡り、規模は長さ313cm、幅15～20cm、床面からの深さ12cmを



第265図　第230号住居跡



第266図　第231号住居跡



第267図　第231号住居跡出土遺物

第108表　第231号住居跡出土遺物観察表（第267図）

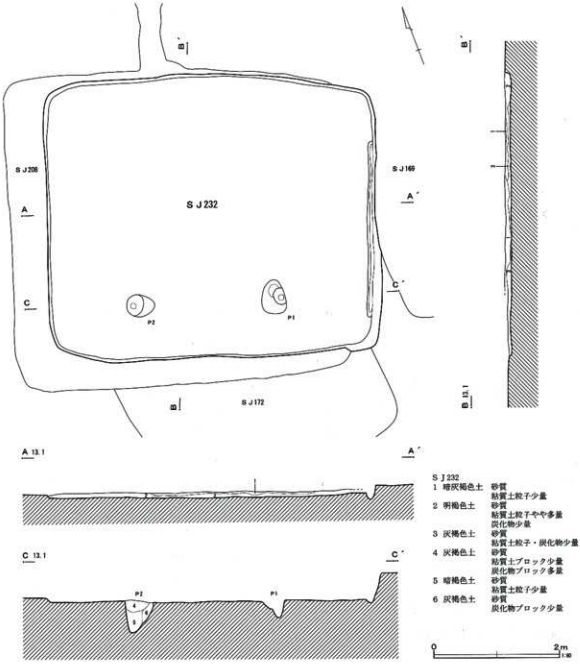
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	短頸壺	11.6	7.7	－	350.4	95	群東	雲	普通	黒褐		172－8
2	土師器	甕	18.8	20.8	－	534.6	20	茨西	雲、角	普通	にぶい褐		190－5
3	土師器	甕	(16.1)	7.8	－	86.3	20	栃南	角	普通	にぶい赤褐		

測る。

ピットは、第234号住居跡の範囲内で、総計21基検出された。P2・P5・P6・P8・P12・P14・P15・P17は、床面検出時に確認されたピットである。その他のピットは、床面精査時には確認されず、床面から7～15cm掘り下げた段階で検出されたものである。

P1～4については、柱穴の可能性が考えられる。その他のピットの帰属については不明であるが、本住居跡の調査段階で検出されたため、ここに図示することとした。

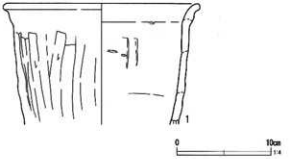
各ピットの平面形と、法量を以下に列記する。P1は円形で径60cm、床面からの深さ23cm、P2は円形で径42×40cm、床面からの深さ14cm、P3は円形で径68×60cm、床面からの深さ25cm、P4は円形で径42×41cm、床面からの深さ42cm、P5は円形で径25



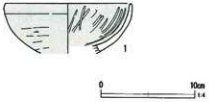
第268図　第232号住居跡

第109表　第232号住居跡出土遺物観察表（第269図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甑	(20.0)	12.7	－	178.9	5	茨西	角	普通	にぶい黄橙	P2	



第269図　第232号住居跡出土遺物



第270図　第233号住居跡出土遺物

第110表　第233号住居跡出土遺物観察表（第270図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.4)	5.3	－	71.5	20	栃南		良好	赤褐		

×24cm、床面からの深さ18cm、P6は円形で径35×28cm、床面からの深さ17cm、P7は円形で径35cm、床面からの深さ37cm、P8は円形で径45×40cm、床面からの深さ15cm、P9は方形で径75×68cm、床面からの深さ25cm、P10は楕円形で径66×48cm、床面からの深さ21cm、P11は楕円形で径37×25cm、床面からの深さ26cm、P12は楕円形で径45×34cm、床面からの深さ24cm、P13は楕円形で径40×25cm、床面からの深さ26cm、P14は不整形で径60×46cm、床面からの深さ14cm、P15は円形で径40×35cm、床面からの深さ19cm、P16は円形で径36×32cm、床面からの深さ15cm、P17は円形で径50×42cm、床面からの深さ18cm、P18は円形で径63×62cm、床面からの深さ71cm、P19は円形で径75×68cm、床面からの深さ64cm、P20は円形で径65×62cm、床面からの深さ54cm、P21は円形で径34×29cm、床面からの深さ23cmである。

遺物は比較的多く出土し、図化し得た遺物は土師器坏・高坏・甕・甑、須恵器坏・短頸壺のほか、支脚などを合わせ、20点であった。

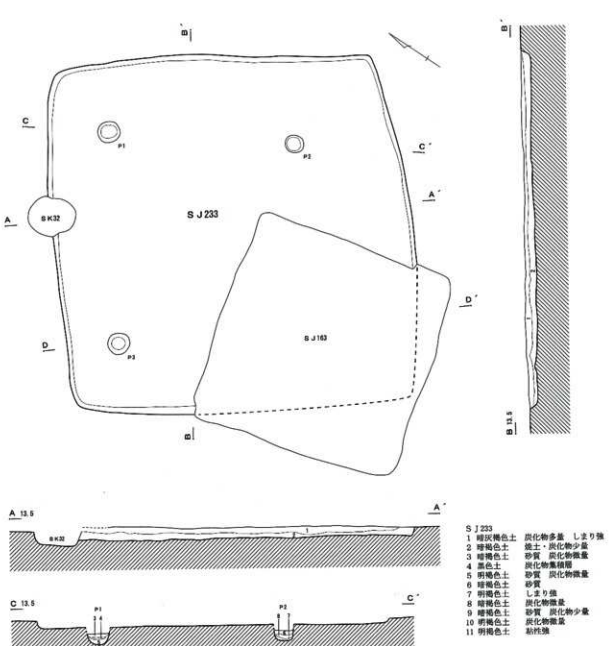
遺物の時期は、5世紀第Ⅳ四半期と考えられる。なお6の須恵器坏は、7世紀代の遺物と考えられるため、混入と推測される。

第235号住居跡（第275・276図）

調査区南側、I－4・5、J－4グリッドに位置する。第181・229・259号住居跡を切り、第221号住居跡、第37号井戸跡に切られている。

平面形は長方形で、規模は東西4.03m、南北4.20m、短軸確認面からの深さ0.40mを測る。主軸方向はN－9°－Wを指す。

カマドは北壁中央に設けられ、方位はN－4°－Wを指す。カマド掘方には、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された（アミ部分）。この粘質土は、幅7～23cm程の規模で、煙道部を囲むように充填されていた。但し、カマドの掘方底面での、充填土の厚さについては不明である。袖部は両袖ともが確認された。カマド袖の住居壁面からの残存規模は、左袖が70cm、右袖が65cmである。燃焼部は幅50cm程で、床面から数cmほどの窪みをもつ。煙道部底面は、床面と28～38cmの高低差をもつ傾斜面で、煙出し部に至る。燃焼部は幅36cm、煙道部は長さ95cm、幅26cm、確認面からの深さ22cmであ



第271図　第233号住居跡

る。燃焼部・煙道部の壁面は、被熱による赤色硬化が顕著であった。

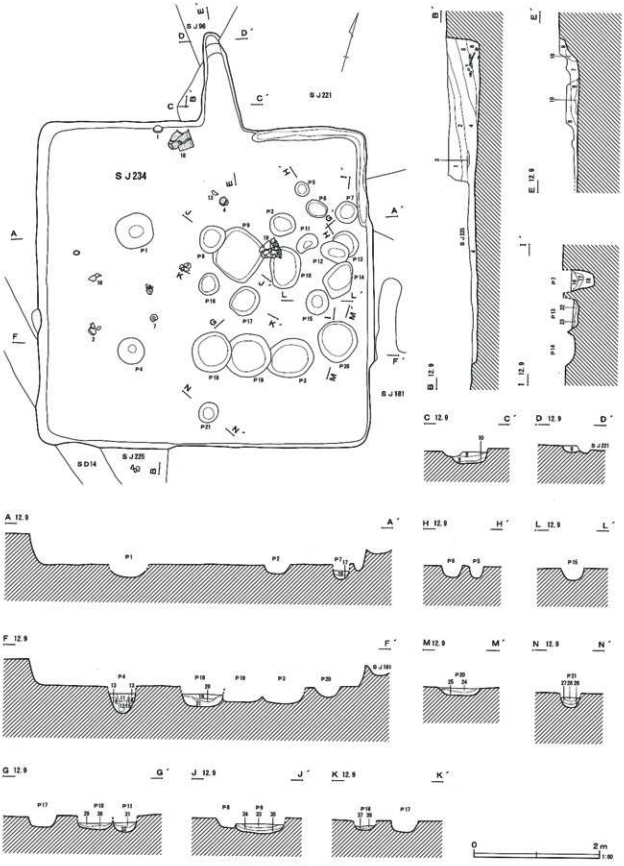
カマド以外の施設は、確認されなかった。

図化し得た遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏・蓋などを合わせ、6点であった。

遺物の時期は、7世紀第Ⅱ～Ⅲ四半期と考えられる。

第236号住居跡（第259図）

調査区南側、J－3グリッドに位置する。第239号住居跡を切り、第194・202・224号住居跡に切られ



第272図　第234号住居跡

S J 234
1 暗褐色土　炭化物微量
2 明褐色土　砂質　しまり弱
3 黒色土　炭化物集積層
4 明褐色土　粘性強
5 灰褐色土　焼土・炭化物多量
6 灰黄色土　砂質　炭化物微量
7 暗褐色土　焼土粒子・炭化物微量
8 黄褐色土　粘性強　しまり強　粒子細かい
9 黄褐色土　焼土粒子・炭化物微量
10 赤褐色土　焼土集積層
11 暗青灰色土　砂質　粘性弱
12 暗青灰色土　粘土質　炭化物微量　粘質強
13 暗灰色土　砂質　粘性弱
14 暗灰青色土　粘土質　粘性強
15 暗青灰色土　砂質　炭化物微量　粘性強
16 青灰色土　炭化物極く微量　粘性強
17 暗青色土　砂質　炭化物微量　粘性強
18 暗青灰色土　中層に炭化物層有り
19 暗褐色土　炭化物極く微量　粘性強　しまり弱
20 暗黄褐色土　粘土粒子微量　粘性強
21 黄褐色土　粘土粒子・炭化物微量
22 黄褐色土　炭化物少量
23 黄褐色土　粘土粒子・炭化物極く微量
24 暗褐色土　焼土粒子・炭化物少量
25 暗黄褐色土　焼土粒子・炭化物極く微量　粘性強
26 暗灰色土　炭化物極く微量　赤褐色の酸化土含む
27 暗灰色土　粘土質　炭化物極く微量
28 暗灰色土
29 暗灰褐色土　焼土ブロック・炭化物多量
30 暗灰色土　焼土粒子・炭化物微量
31 暗灰褐色土　焼土ブロック・炭化物多量
32 灰褐色土　砂質　粘性強　粒子細かい
33 暗褐色土　炭化物微量
34 暗褐色土　炭化物微量　粘性強
35 暗灰色土　炭化物微量　砂粒子少量
36 黒色土　炭化物微量　焼土ブロック少量　焼土粒子微量
37 暗灰褐色土　焼土粒子・炭化物極く微量

ている。住居プランの大部分を失っており、遺存しているのは北東コーナーの部分のみであるため、平面形については不明である。

検出し得た範囲内での規模は、東西2.05m、南北2.62mであり、確認面からの深さ0.14mを測る。主軸方向は、N－26°－EまたはN－64°－Wを指すと推定される。

カマドは確認されなかった。カマド以外の施設として、北東コーナーで、貯蔵穴と推測される土坑が1基と、これに切られているピット1基が確認された。この土坑の平面形は楕円形で、断面形は椀状を呈する。土坑の規模は、長径97cm、短径78cm、床面からの深さ25cmを測る。

ピットは円形と思われ、径は東西方向で45cm、床面からの深さ12cmを測る。

遺物は出土しなかった。

本住居跡を切っている第202号住居跡の、出土遺物の時期は、6世紀第Ⅰ四半期である。この点から、本住居跡の時期は、それ以前であると推測される。

第238号住居跡（第277・278図）

調査区中央部、H－3・4、I－4グリッドに位置する。第95・103・107・109・118・119・173・176号住居跡、第9号溝跡に切られている。

平面形は、北壁と南壁に規模の差をもつ台形を呈する。規模は東西（7.45）m（北壁）・5.78m（南壁）、南北7.47m、確認面からの深さ0.48mを測る。主軸方向はN－18°－Wを指すと推定される。

カマドおよび、その他の施設は確認されなかった。

図化し得た遺物は、土師器坏・坩を合わせ、計4点であった。

遺物の時期は、6世紀第Ⅰ四半期と考えられる。

第239号住居跡（第279・280図）

調査区南側、J－3・4グリッドに位置する。第202・223・246号住居跡を切り、第180・194・219・236号住居跡、第30号井戸跡に切られている。

平面形は長方形で、規模は東西4.93m、南北5.54m、確認面からの深さ0.30mを測る。主軸方向はN－35°－Wを指す。

カマドは西壁中央に設けられ、方位はN－42°－Wを指す。袖部は両袖ともが確認され、住居壁面からの残存規模は、左袖が70cm、右袖が60cmである。燃焼部は、住居壁面より奥にまで及んでおり、長さ125cm、幅24cm、床面から深さ4cmで、僅かな稜線を経て煙道部に続く。煙道部は、長さ136cm、幅28cm、確認面からの深さ26cmであり、燃焼部との高低差はほとんどみられない。煙出し部は、急激に立ち上がる。煙道部底面には、全体的に炭が残っているのが確認された。

カマド以外の施設は確認されなかった。

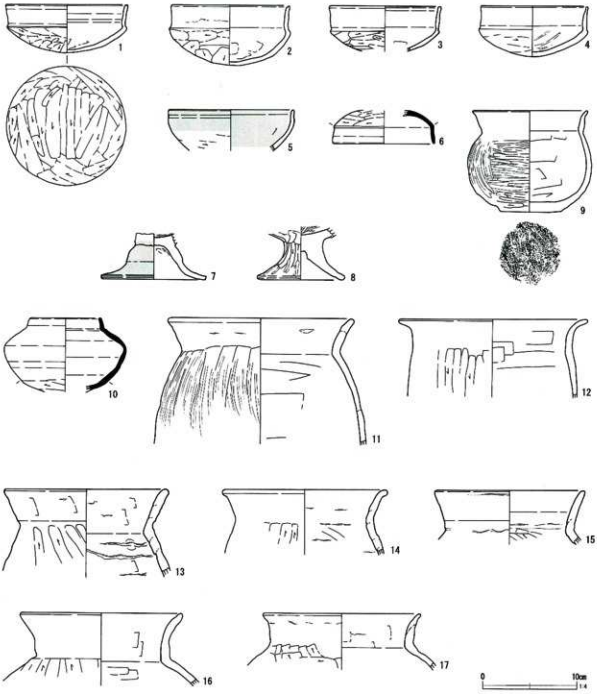
1の土師器坏は、カマド燃焼部底面からの出土である。

図化し得た遺物は、既述の土師器坏と、砥石1点を合わせ、計2点であった。

遺物の時期は、6世紀第Ⅱ四半期と考えられる。

第241号住居跡（第281・282図）

調査区南側、I－3・4グリッドに位置する。第

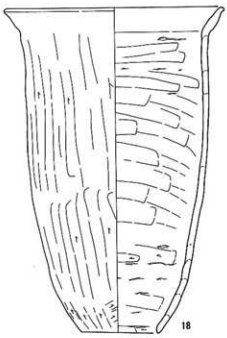


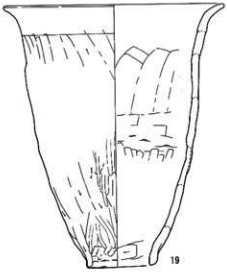
第273図　第234号住居跡出土遺物（1）

246号住居跡を切り、第96・199・200・221・234号住居跡に切られている。

本住居跡は、失われている部分が多く、平面形は不明である。確認し得た範囲内での規模は、東西4.05m、南北3.95mであり、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方向は、S－68°－Eを指す。

カマドは西壁に設けられているが、壁面の中央であるのか、南北のいずれかに寄っているのかについてまでは不明である。袖部は、両袖ともが確認された。袖部の、住居壁面からの遺存規模は、左袖が65cm、右袖が45cmである。燃焼部は、住居壁面より奥まで掘り込まれてはいるが、その外側には煙道部ら





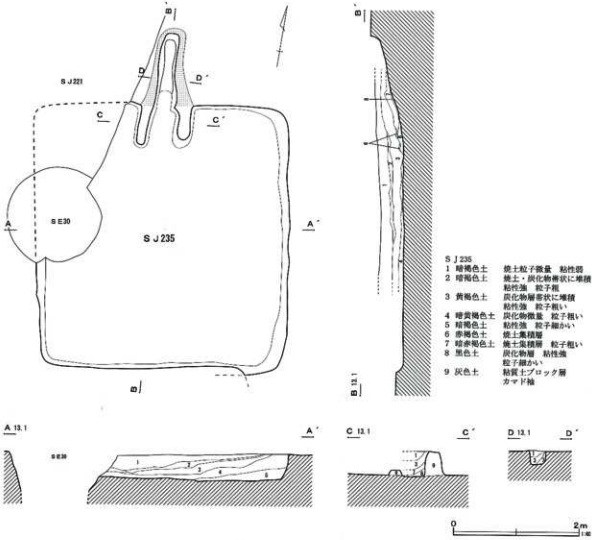
第274図　第234号住居跡出土遺物（2）

第111表　第234号住居跡出土遺物観察表（第273・274図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	12.9	5.1	－	189.8	95	群東	角	普通	明赤褐		172-9
2	土師器	坏	12.4	6.4	－	226.1	90	群東		普通	橙		172-10
3	土師器	坏	(11.8)	4.8	－	67.7	15	群東	角、針	普通	橙		
4	土師器	坏	11.5	5.2	－	186.0	95	群東	雲、角、針	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩か　暗文か	173-1
5	土師器	坏	(13.0)	4.6	－	26.8	20	茨西	角、針	普通	にぶい黄橙		
6	須恵器	蓋	(10.7)	3.4	－	36.1	40	南比企	針	不良	褐灰		
7	土師器	高坏	－	4.8	(10.9)	160.1	60	埼南	雲、針	良好	赤褐		
8	土師器	高坏	－	5.5	9.3	204.9	50	栃南～茨西		普通	赤橙		
9	土師器	甕	(12.0)	10.7	6.4	392.1	75	茨西	雲、針	普通	浅黄	黒斑	190-6
10	須恵器	有蓋短頸壺	(7.3)	7.8	－	126.8	30	湖西	針	普通	灰		
11	土師器	甕	19.0	13.3	－	909.9	20	栃南		普通	橙		191-1
12	土師器	甕	(19.6)	8.3	－	132.9	5	佐野		普通	にぶい黄橙	P15	
13	土師器	甕	(17.0)	9.3	－	136.5	5	茨西		良好	にぶい黄橙		
14	土師器	甕	(17.0)	5.9	－	156.4	5	茨西		普通	灰黄褐		
15	土師器	甕	(15.8)	5.7	－	116.8	5	栃南	雲、針	良好	橙	P13	
16	土師器	壺	(17.0)	7.6	－	527.2	15	栃南	角、針	普通	灰黄褐	P1	
17	土師器	壺か	(16.3)	5.9	－	100.7	10	佐野	雲、角	普通	にぶい褐		
18	土師器	甑	23.0	34.3	8.3	2408.9	80	佐野	雲	普通	浅黄		215-1
19	土師器	甑	23.1	27.7	7.2	1950.9	90	茨西		普通	にぶい黄橙		215-2
20	土製品	支脚	－	6.5	(5.8)	84.3	20		雲	普通	にぶい黄橙		

しき掘り込みは確認されていない。燃焼部は長さ71㎝、幅38㎝、床面からの深さ7㎝を測る。燃焼部から平坦な面で、煙出し部と移行し、急激に立ち上がる。焚口部底面・燃焼部壁面は、被熱による赤色硬化が顕著であった。また、焚口手前から住居中央にかけて、炭や焼土が広く分布していた。

カマド以外の施設としては、貯蔵穴とピットが1基ずつ検出された。貯蔵穴は円形で、規模は85×80㎝、床面からの深さ15㎝で、皿状を呈する。住居壁面は、カマドの右側壁面よりも、貯蔵穴の設けられて



第275図　第235号住居跡

いる左側壁面の方が、15～20cmほど奥まって構築されている。

P１は円形で径50×46cm、床面からの深さ18cmを測る。

カマド内と貯蔵穴内から、比較的まとまった状態で土師器甕・甑が出土した。土師器甑（６）は、貯蔵穴の底面からの出土である。

支脚を合わせ、図化し得た遺物は、土師器高坏・甕・甑のほか、土製支脚などを合わせ、計７点であった。

遺物の時期は、６世紀第Ⅰ四半期と考えられる。

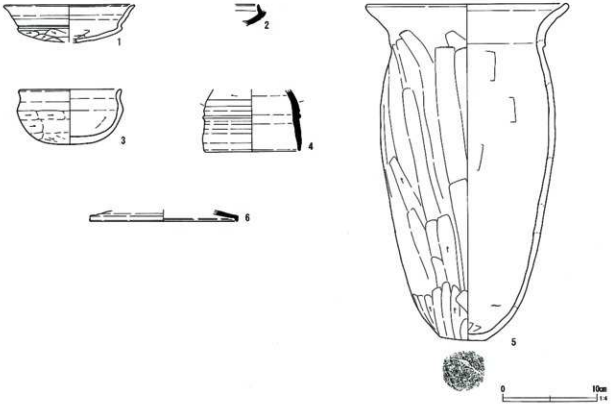
第242号住居跡（第283図）

調査区西側、H－２グリッドに位置する。第169・172・208・232号住居跡に切られている。

遺構の大部分が失われているため、平面形は不明である。検出し得た範囲内で、東西3.75m、南北4.22mを測り、確認面からの深さは0.20mである。主軸方向はN－31°－W、またはN－59°－Eを指すと推測される。

カマドは確認されなかった。

カマド以外の施設として、ピット５基が検出された。P１・２は第242号住居跡の範囲内、P３～５は図上では第208号住居跡に位置している。P３～５については、第242号住居跡の床面精査中に確認されたため、本住居跡で報告することとした。しかし、本住居跡の覆土を切り込んでいたピットを見落とし、



第276図　第235号住居跡出土遺物

第112表　第235号住居跡出土遺物観察表（第276図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	14.0	3.9	－	34.9	25	埼北	角	良好	にぶい褐		
2	須恵器	坏	－	2.3	－	4.9	10	渕西		普通	褐灰		
3	土師器	坏	(10.8)	5.8	－	111.4	40	埼北	角	不良	褐灰		173−2
4	須恵器	蓋	－	6.5	(10.0)	34.3	15	東海か		普通	灰		
5	土師器	甕	(21.0)	35.4	4.8	931.4	35	埼北	雲、角	普通	橙		215−3
6	須恵器	蓋	－	1.1	－	5.4	5	南比企	針	普通	灰		

床面精査時に確認したという可能性も否定できない。

P1は円形で長径60×短径56cm、床面からの深さ32cm、P2は円形で径28×24cm、床面からの深さ25cm、P3は円形で径28×26cm、床面からの深さ10cm、P4は楕円形で径60×46cm、床面からの深さ58cm、P5は楕円形で径30×20cm、床面からの深さ25cmを測る。

遺物は出土しなかった。

本住居跡は、6世紀第Ⅲ四半期の第169・208・232号住居跡に切られている。この点から、本住居跡の時期はそれ以前であると推測される。

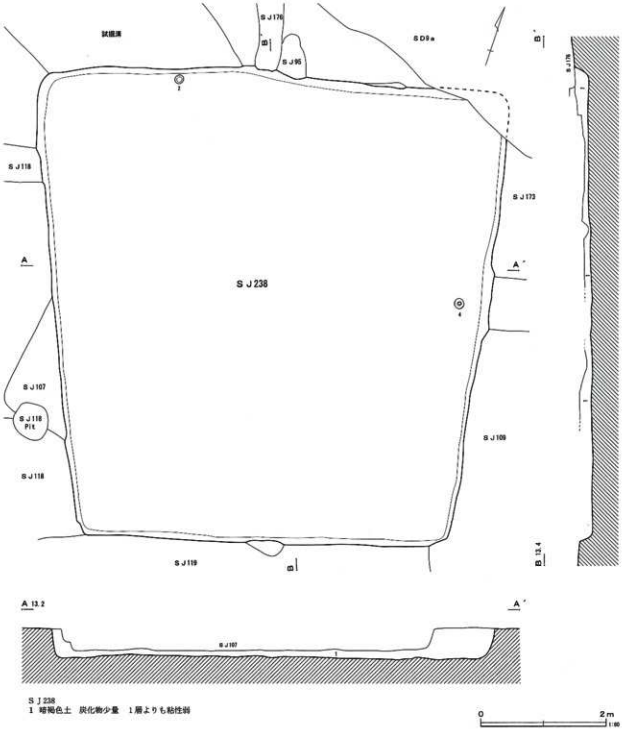
第243号住居跡（第284・285図）

調査区南側、I−2・3グリッドに位置する。第187・189・203・211・220号住居跡、第14号溝跡に切られている。

平面形は正方形で、規模は東西3.45m、南北3.63m、確認面からの深さ0.12mを測る。主軸方向はN−29°−W、またはN−61°−Eを指す。

カマドは確認されなかった。

カマド以外の施設としては、ピットが3基検出された。P1は楕円形で径60×45cm、床面からの深さ25cm、P2は楕円形で径46×30cm、床面からの深さ



第277図　第238号住居跡

10cm、P3は円形で径55×52cm、床面からの深さ17cmを測る。

図化し得た遺物は、土師器坏・甕・甑など、合わせて3点であった。

遺物の時期は、5世紀第Ⅳ四半期と考えられる。

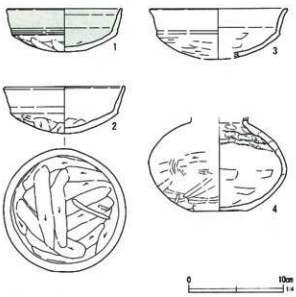
第246号住居跡（第286・287図）

調査区南側、I・J－3グリッドに位置する。第200・234・239・241号住居跡、第14号溝跡に切られている。

本住居跡は、プランの多くを失っているため、平面形は不明である。検出し得た範囲で、東西2.58m、南北4.90m、確認面からの深さ0.23mを測る。プラ

第113表　第238号住居跡出土遺物観察表（第278図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	4.5	－	86.3	25	埼南	雲、針	良好	橙		173－3
2	土師器	坏	12.8	4.9	－	222.8	100	群東	雲、角、針	良好	橙		173－4
3	土師器	坏	(14.6)	5.2	－	68.4	20	群東		普通	にぶい褐		
4	土師器	坩	－	9.7	5.6	46.3	85	下北	雲	普通	明黄褐		191－2



第278図　第238号住居跡出土遺物

ンに歪みがあるため、主軸方向についても不明である。

カマドおよび、その他の施設は確認されなかった。

図化し得た遺物は、土師器坏・甕の、計3点であった。

遺物の時期は、5世紀第Ⅳ四半期と考えられる。

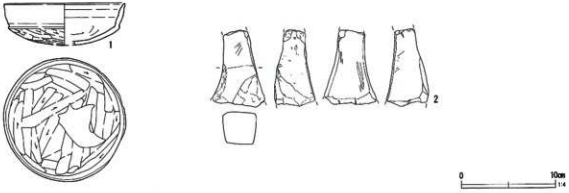
第247号住居跡（第288・289図）

調査区東側中央寄り、H－5グリッドに位置する。第108・133・134・147・151号住居跡に切られている。

遺構の大部分を失っていること、プランがやや歪んでいることなどから、遺構の規模や平面形は不明である。検出し得た範囲内での規模は、東西3.20m、南北2.05mであり、確認面からの深さ0.33mを測る。

カマドおよび、その他の施設は確認されなかった。

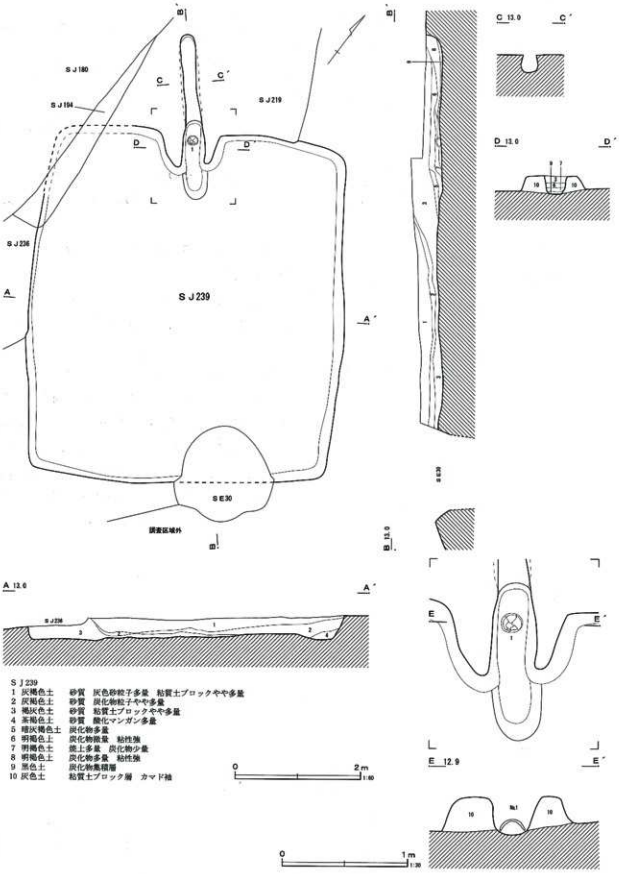
図化し得た遺物は、土師器坏・甕・小型甕、および臼玉を含め、計5点であった。



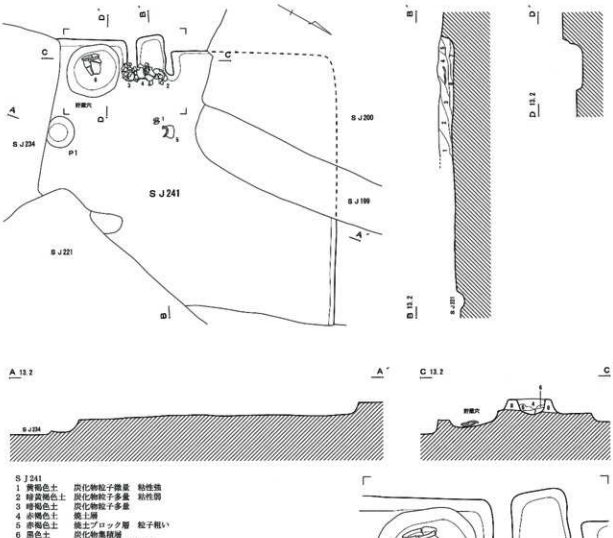
第279図　第239号住居跡出土遺物

第114表　第239号住居跡出土遺物観察表（第279図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	12.8	4.4	－	161.4	80	群東	雲、角	普通	橙	カマド燃焼部	173－5
2	石製品	砥石	長8.1幅5.6厚3.3重183.7								灰白	砂岩製	235－1



第280図　第239号住居跡



第281図　**第241号住居跡**

遺物の時期は、5世紀第Ⅲ四半期と考えられる。

第249号住居跡（第290・291図）

調査区東側、H・I－6グリッドに位置する。第122・131・132・146・147号住居跡、第96号溝跡に切られている。

遺構の大部分を失っているため、平面形は不明である。検出し得た範囲内での規模は、東西3.80m、南北4.30m、確認面からの深さ0.22mである。主軸方向はN－24°－W、またはN－66°－Eを指すと推定される。

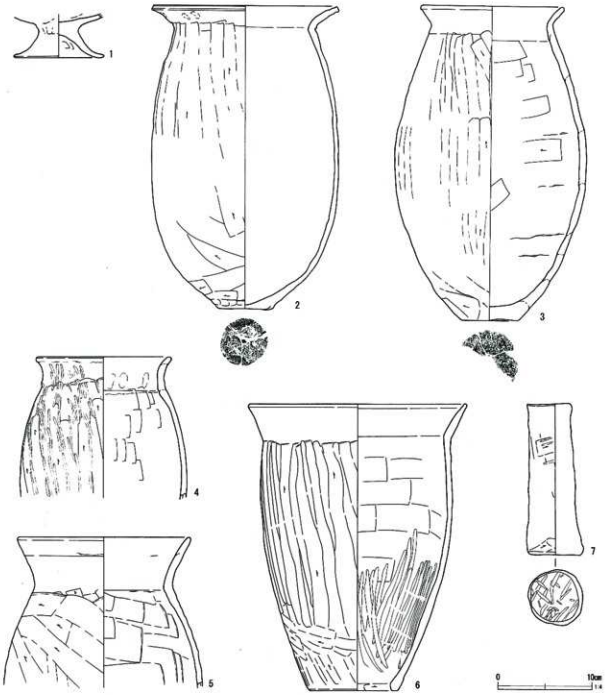
カマドは確認されなかった。

カマド以外の施設として、ピットが1基検出された。P1は楕円形で、径53×36cm、床面からの深さ25cmである。

図化し得た遺物は、土師器高坏・甕のほか、白玉1点と合わせ、計3点であった。

遺物の時期は、5世紀第Ⅳ四半期と考えられる。

第250号住居跡（第292・293図）



第282図　第241号住居跡出土遺物

調査区南側、I・J－2・3グリッドに位置する。第187・194・203・218・219号住居跡に切られている。

平面形は長方形で、規模は東西4.62m、南北5.50m、確認面からの深さ0.38mを測る。主軸方向はN－35°－W、またはN－55°－Eを指すと推定される。カマドは確認されなかった。

カマド以外の施設としては、ピットが3基検出された。P1・P2は、床面精査の時点では検出されず、床面から17～25cm掘り下げた段階で確認されたものである。

P1は円形で径26cm、床面からの深さ33cm、P2

第115表　第241号住居跡出土遺物観察表（第282図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考		図版
1	土師器	高坏か	－	4.6	(9.6)	99.4	5	埼北	雲、角、針	普通	橙			
2	土師器	甕	19.6	32.1	5.5	1317.9	70	栃西		普通	明褐灰	カマド　木業痕		215-4
3	土師器	甕	(15.0)	33.1	6.1	1808.5	80	栃南		普通	にぶい橙	カマド　被熱		216-1
4	土師器	甕	(14.2)	15.1	－	254.7	30	群東	角	良好	にぶい橙	カマド		
5	土師器	甕	(18.2)	15.7	－	531.4	20	茨西	雲	普通	にぶい橙			
6	土師器	甑	22.6	30.0	9.3	2090.0	95	栃南		普通	にぶい黄橙	貯蔵穴		216-2
7	土製品	支脚	4.6(径)	15.7	5.4	591.6	100	茨西か	雲、針	普通	橙	被熱		191-3

は楕円形で径41×28cm、床面からの深さ26cm、P3は不整形で径80×65cm、床面からの深さ13cmを測る。

図化し得た遺物は、土師器甕・甑の計2点であった。

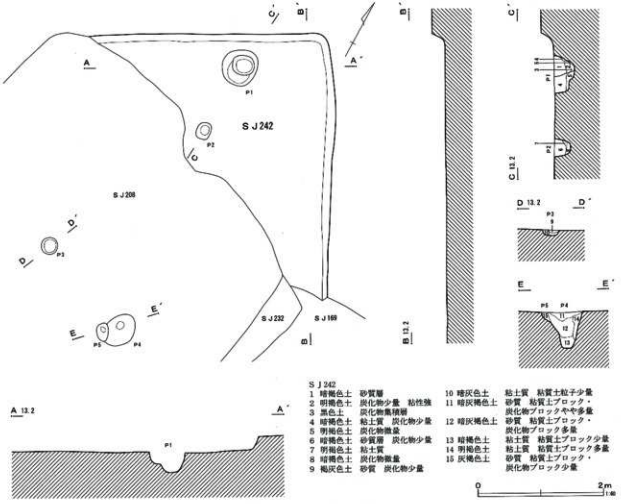
遺物の時期は、5世紀第Ⅳ四半期と考えられる。

第251号住居跡（第294～297図）

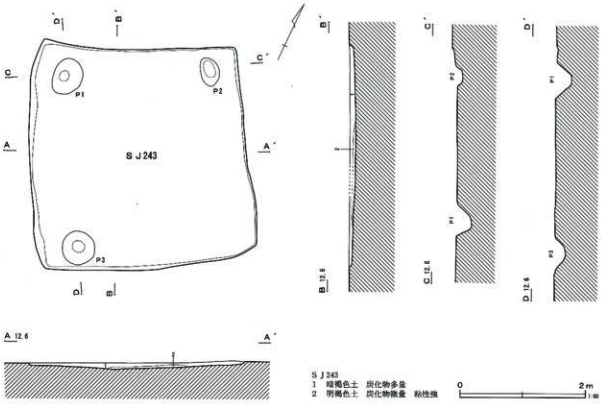
調査区北東部、G－6・7グリッドに位置する。第201号住居跡を切り、第101・116・252・255・260号住居跡に切られている。

平面形は長方形で、規模は東西4.70m、南北5.35m、確認面からの深さ0.40mを測る。主軸方向は、N－8°－Wを指す。

カマドは、北壁中央に設けられている。煙出し部は、内側が被熱した径20cm程の円形のプランとして



第283図　第242号住居跡

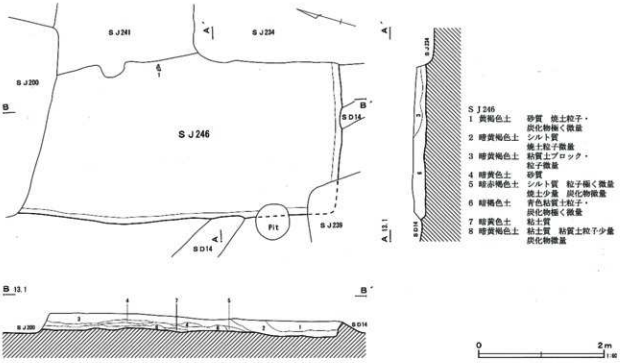


第284図　第243号住居跡

第285図　第243号住居跡出土遺物

第116表　第243号住居跡出土遺物観察表（第285図）

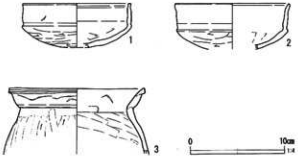
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.3)	6.1	－	89.6	30	栃南～茨西		不良	にぶい黄橙		
2	土師器	甑か	(13.8)	6.0	－	81.3	5	栃南	雲	普通	褐		
3	土師器	甕	(18.0)	10.4	－	240.8	5	栃南～茨西	雲	普通	灰黄		191－4



第286図　第246号住居跡

第117表　第246号住居跡出土遺物観察表（第287図）

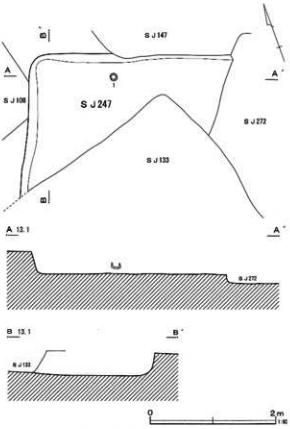
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(11.4)	4.6	—	63.4	40	群東	雲、角、針	普通	橙		
2	土師器	坏	(12.0)	4.8	—	29.1	15	群東	雲、針	普通	橙		
3	土師器	甕	(14.3)	7.0	—	92.6	10	茨西	雲	良好	橙		



第287図　第246号住居跡出土遺物

検出された。また煙道部は、天井部（13・14層）が残された状態であった。カマド掘方には、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された（アミ部分）。この粘質土は、幅30～40cm程の規模で、煙道部を囲むように充填されていた。但し、充填土の底面の厚さについては不明である。袖部は両袖とも確認された。袖部の住居壁面からの残存規模は、左袖が40cm、右袖が60cmである。燃焼部は住居壁面までの掘り込みで、奥行き55cm、幅40cm、床面からの深さは5cmで皿状に窪む。煙道部へは、僅かな稜線を経て煙出し部に続く。煙道部は、長さ120cm、幅10～30cm、確認面からの深さ25cmである。煙道部底面は、緩やかな傾斜で煙出し部に至る。燃焼部～煙出し部まで壁面・底面ともに、被熱による赤色硬化が顕著であった。燃焼部底面には、土師器高坏（9）が倒立の状態で検出されたが、支脚として用いられたと推測される。カマド内のみではなく、その周辺にも炭が分布していた。

カマド右袖の脇には、下半部を欠いた土師器甕（19）を台として、土師器鉢（11）を置き、さらにその上に、土師器甑（23）が重ねられた状態で検出された。また、カマド焚口手前と左袖脇からは土師



第288図　第247号住居跡

器坏（6・7）が、北西コーナーからは土師器甕・甑（13・15・18・22）か出土した。下半部を欠く土師器甕は、台として用いられたものであろうか。

カマド以外の施設としては、ピットが4基検出された。いずれも位置・規模・形状などから、主柱穴と推定される。

P1は楕円形で径46×38cm、床面からの深さ18cm、P2は楕円形で径65×52cm、床面からの深さ35cm、P3は円形で径62×60cm、床面からの深さ42cm、P4は楕円形で径53×45cm、床面からの深さ22cmである。貯蔵穴・周溝などの施設は、検出されなかった。

遺物は、カマド内・周辺および、北壁側からの出土が主であり、図化し得た遺物は25点であった。

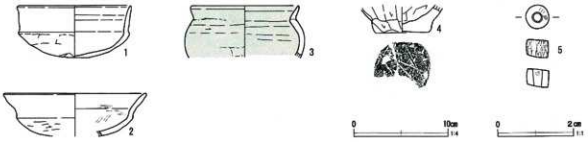
以上の遺物の他に、鍛冶に伴うと推測される粘土塊の小片が1点出土したが、図化には至らなかった。

図化し得た遺物は、土師器坏・高坏・鉢・甕・甑ほかを含め、計25点であった。

遺物の時期は、5世紀第Ⅳ四半期と考えられる。

第252号住居跡（第298・299図）

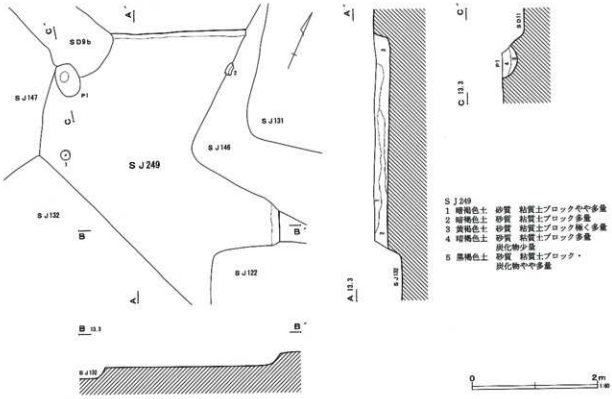
調査区北東部、G・H－7グリッドに位置する。



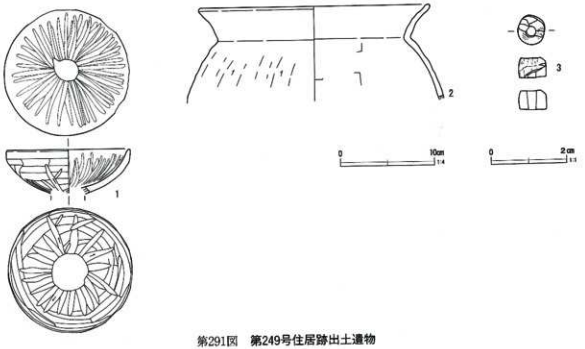
第289図　第247号住居跡出土遺物

第118表　第247号住居跡出土遺物観察表（第289図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	12.0	5.5	－	156.9	100	群東	角	良好	橙		173-6
2	土師器	坏	(15.0)	4.5	－	48.7	15	下総	雲	普通	橙		
3	土師器	小型甕	(11.4)	5.5	－	51.9	15	比企	雲、角	普通	にぶい赤褐		
4	土師器	甕	－	2.3	(5.8)	83.7	5	茨西	角	普通	にぶい橙	木葉痕	
5	石製品	白玉	径0.62孔径0.23厚0.46重0.29										234-1



第290図　第249号住居跡



第291図　第249号住居跡出土遺物

第119表　第249号住居跡出土遺物観察表（第291図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	高坏	13.1	4.6	－	211.6	95	群東	角、針	良好	橙		173－7
2	土師器	甕	(24.4)	10.0	－	158.1	5	佐野	雲、角	普通	明黄褐		
3	石製品	臼玉	径0.73孔径0.24厚0.48重0.33										234－1